

特集 自立のイメージを探る

《座談会》
やさしいことばで
自立を語ろう

インタビュー／片山洋次郎
「父性」の役割はトリックスター

男の更年期は
なぜ隠されてきたのか
宮 淑子

みにくいアヒルの子が世界を散歩
許 家玉

We

7

1997

くらしと教育をつなぐWe



女と男の家庭科新時代

季刊ホリスティック教育 第4号

特集 **生命(いのち)**—教育・子育ての根底にある生命観を考える

—「くらしと教育をつなぐ—We」の稲村恭子さんも書いています—

内容の一部 世界のホリスティック教育の源流を求めて
クリシュナムルティと英知の教育
エマソンの『魂』

シンポジウム「教育・医療・社会がかわるとき」ほか

「いのちのつながりを求めて」・「いかにして真の人間を育てるか？」
この二つのテーマを本誌は扱っています。

発行 日本ホリスティック教育協会 振替 00290-3-29735
事務局 電話 045-243-6244 FAX 045-243-6241
〒232 横浜市南区吉野町4-19-2-102

定期購読をどうぞ 見本誌請求は1,000円を上記にお振込ください。

.....知りたい情報 を載せて10日おきに届きます.....

さべつ・おんな・
はたらく・がっこう・アジア
たべもの・からだ・老い・
かんきょう・かんけい・
自分史・映画・CD・
書評・マンガ・読者の声・
集会・催し.....



創刊50年をすぎました。
女の視点で創る
もう1つのメディア
全国の草の根の動きを
つたえます。

ご希望があれば見本紙を送ります。

わたしの情報紙

ふえみん
f e m i n

婦 人 民 主 新 聞
WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

申し込み先 婦人民主クラブ

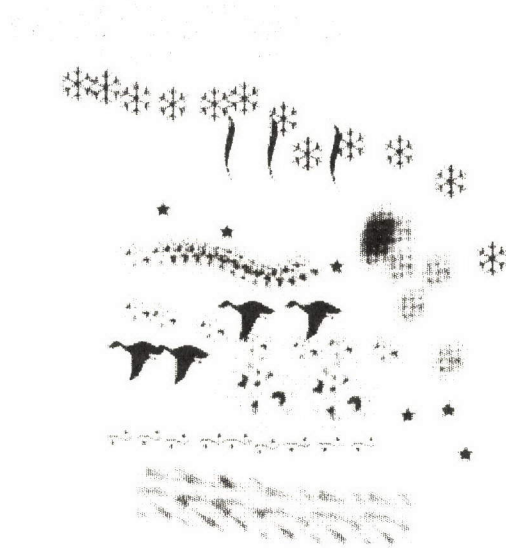
年間購読料 9000円
東京都渋谷区神宮前3-31-18
Tel 03(3402)3244.3238
FAX 03(3401)3453
Tel 06(371)2429(大阪支局)

97年7月号

くらしと教育をつなぐ

We

◆ 特集 自立のイメージを探る ◆



Tani

《インタビュー》

片山洋次郎さん（聞き手／稲邑恭子）

「父性」の役割はトリックスター……………12

連 載

- おんなが歳をとるということ 木村 栄 ……47
- いきいきごんぼ 桑田 良彦 ……48
- 変な子じゃないよね 滝野澤直子 ……50
- このままではいけない？ 吉原 令子 ……52
- リレーエッセイ
セックスレスなわたしたち 泉 万里 ……54
- 蔦森樹の巡業日記 蔦森 樹 ……56
- 居場所考 水田 宗子 ……57

- ◇ 読者のひろば …… 63
- ◇ 編集後記 …… 65

特集 自立のイメージを探る

《座談会》

鷺頭幹男・鷺頭知子・江口凡太郎・江口千裕

やさしいことばで
自立を語ろう……………4

- ☆ 男の更年期はなぜ隠されてきたか 宮 淑子 ……………20
 ☆ みにくいアヒルの子が世界を散歩 許 家玉 ……………26

女と男の家庭科新時代

- フェンスを越えて 小平 陽一 ……………31
 ■ 私の家庭科—ラフスケッチ 香川 恭子 ……………32
 ■ 家庭科—風がかわる匂いがかわる
 —ホームページを利用して 立川 仁美 ……………36
 ■ 楽市楽座 加藤 昭仁 ……………40
 ■ かる〜い家庭科相談室 家庭科編集室 ……………42
 ■ 共学家庭科 論争 青山 禎子 ……………44
 ■ オホーツクの潮風荒く 江口凡太郎 ……………46

《座談会》

やさしいことばで自立を語ろう

▼鷲頭幹男・鷲頭知子・江口凡太郎・江口千裕（まとめ／佐藤元治）

今年のWeフォーラム全体会の講師、鷲頭幹夫さん・知子さんご夫妻にインタビュアー……鷲頭さんをちよつと紹介する程度に考えていたのですが、話は熱く盛り上がり、「自立」とは何か？という分科会さながらの話に発展。この続きは旭川で一緒にどうぞ。（江口凡太郎）

幹夫 凡ちゃんと知り合ったきっかけは何だったっけ。

凡太郎 学生時代からお世話になってる名取弘文さんに鷲頭さんの話を聞いて、会いたいなと思ったんだ。それで、鷲頭さんが事務局を務めていた、鴻之舞鉱山跡地への自衛隊戦車射場誘致に反対する運動の集会に参加した。ぼくは教職に就いたばかりだった。授業中、おにぎりが飛んで来るんだよね。このまま先生をしていけるのかなあ、と不安でいっぱいなのに、ふらっと寄って話を聞いてくれる拠り所に鷲頭一家がなってくれたんだよね。

幹夫 一緒に来た時、仲間の先生が言ったよね。「おに

ぎりならいいよ、オレなんか椅子が飛んで来るんだよ」。そんな現実にはいきなり出くわして「どうするべ」と戸惑う若い先生をオレなりに応援できれば、と思ってるね。

凡太郎 鷲頭さんちで朝まで語り合ってる、畑を見て回って、ヤギを見て。寝不足で酒も残っているんだけど、自然の懐に抱かれているようで、なんだか気持ちよかった。千裕 鷲頭さんちで作る野菜は本当においしいよね。

知子 生ごみを「堆肥に使って」とウチに届けてくれる、おもしろい関係だね。最初に凡ちゃんと会った時、家庭科の先生と聞いて、世の中おもしろくなってきたと思ったな。

幹夫 荒れる子どもたちを押さえつけるのがいい先生で、おにぎりが飛んでくるのはダメな先生……。そんな一般的評価があるけど、凡ちゃんは権威的になれないタイプだね。子どもたちにとってオアシスになれる先生が職員室やPTAから評価されず、自信を失い辞めてし

まうような学校には物言いをつけたい。

凡太郎 最近は「初心」を忘れてしていると反省してるんだ。ところでフォーラムの講演テーマ「やさしい言葉で自分を語ろう」のやさしいは「易しい」、それとも「優しい」なの？

幹夫 両方の気持ちを込めてひらがなにしたらつもり。オレが紋別の地元新聞に連載している八十歳以上のお年寄りの聞き書きは両方をめざしているの。易しくて優しい言葉で、ストーブを囲んでじっちゃん、ばっちゃんの昔話を聞くような感じで読めれば、とね。

取材も工夫があるね。新聞記者が来ると思えば、じっちゃん、ばっちゃんは緊張しちゃうんだよ。九十歳のばっちゃんを訪ねたときは、身構えてコチンコチンになっ



鱈頭幹夫(わしず・みきお)

1949年北海道置戸町生まれ。東京、京都、神奈川で10数種類の仕事をを経て、紋別市で地元新聞記者、北見市で学習塾と自給百姓ぐらしを始め、12年前から紋別市で半農半塾ぐらし。3年前から地元新聞に古老の聞き書きなどを書く。著書に「おれは糞を汲む」(径書房)、共著「ゴミ事典」(八月書館)、聞き書き「もんべつに生きて」(紋別新聞社)第1集、第2集、第3集(7月刊行予定)

ているのがわかった。耳のそばで大声で世間話をしていくうちに、オレの膝をたたいて大笑いするようになった。「ワシね、新聞の人が来るって聞いて、おつかねえ(怒ろしい)人が来ると思ってたんだ」って。「取材」と言えばなるべく格好悪い所を見せないように、よそ行きの言葉で当たりさわりなく煙幕を張るわけでしょう。それを一緒に笑えるまでに持っていけるかどうかが勝負なんだ。

知子 安心して話せる関係を作れると楽になるよね。「感情的なのはよくない」というけど、もつと感情を素直に出し合って話した方がいいんじゃないかな。お互いが何に怒っているのか、何を悲しむのか実感できるでしょ。

凡太郎 怒りをあらわにするって難しいよ。ほくが教員になりたての頃、生徒を叱るにしても週二時間の授業だけの付き合いではよそ行きの言葉しか使えなかったなあ。

幹夫 オレが開いている「手習い塾」ではね、めったに子どもたちを叱らないんだ。入塾した子に「叱るのも叱られるのも嫌いだ、だって君たちにオレは雇われているんだから」と言うときョトンとしてる。叱るのは、本当はわからないのにかかってるふりをしたときと、わからない友達に冷たいとき。特に、質問するのが格好悪いなんて思ってたふりをしたときは、思いっきり叱



鷲頭知子 (わしず・ともこ)

1949年北海道紋別市生まれ。精神科の看護婦を目指して看護学院在学中に幹夫さんと知り合い京都で共同生活を始める。三女を産み育てながら空き地を耕す楽しさに魅せられて離農跡住家で本格的な百姓ぐらしを始め、毎年1回しか描けない絵を畑のキャンパスに描くのが最高におもしろいと思っている。「手足の」知恵をいっぱい身につけて次の代に手渡したい。

る。「何のためにわざわざ塾に来たんだ。帰ってひっくり返ってテレビでも見てろ」とね。わからない友達に教えるのに時間が取られるのがイヤなら辞めればいい。いろんな塾があるんだから。

凡太郎 どうして塾を始めたのか聞きたいな。

幹夫 最初に始めたのは一九七七年に北見市で。その前は、かあちゃん(知子さん)の実家がある紋別で地元紙の新聞記者をやっていた。上下ともジーパンでオートバイに乗って、学校回りをしているうちに、子どもたちと仲良くなってね。うちによく遊びに来るようになったんだ。子どもたちの話を聞くのが楽しくてね。型にはまらず子どもたちと関われる場所は、と考えたんだ。

知子 おっかない(恐ろしい)兄ちゃんばかり、父さん(幹夫さん)の塾は集まっていたね。

幹夫 ツッパツているやつは武装した目だ。親とか、先生とか、権力を振りかざすヤツらに「てめえ、この野郎!」とキバをむくんだ。彼らとの関係を作るのはオレ自身が望むところ。みんなまっとうな神経を持っているから。

千裕 反抗している時って、だれかに自分のことをわかってもらいたいんだよね。だから反抗することはすごく大切なんじゃないかな。それに悪役というのか、反抗させてくれる人がいることも大事だよ。

知子 トサカ頭の兄ちゃんに「どうしてそんな格好するの?」と聞いたことがあるの。彼はこう言ったよ。「外見じゃない。「内見(ないけん)」の問題なんだ。勉強できるヤツには言わないことでもオレたちには頭ごなしに怒鳴り散らす先公らの態度がおもしろくないんだ」。

幹夫 彼らは弱いモノいじめをしてストレスを発散するようなことはしなかった。権力に対する反抗だからこそオレは連帯した。野球が大好きなツッパリ中学三年生がオレの塾に来ていた。高校野球をしたくて中学の先生に進学の相談をしたら「お前みたいなのは受かるわけがない」と突き放されたそう。オレが「そんなバカヤロウ



江口凡太郎（えぐち・ほんたろう）
1968年東京生まれ、茨城育ち。北海道紋別南高等学校勤務。「オホーツクの潮風荒く」の連載も7年目。今年はフォーラム実行委員長。

学校ではじかれてい
る子どもたち
を代弁して、
受験一辺倒
の中学教育
に一石を投
じようとし
た。「人間と

先生を見返したいなら、つき合うぞ」と言うと、彼はかけ算の九九から始めた。ニンガシ、ニサンガロクと九九を練習している息子の姿を見たお父さんが感激しちゃってね。結果は見事合格、しかも数学はトップだったらしいよ。あこがれのユニフォームに身を包んで一年生からエースピッチャーの座をつかんだんだ。

千裕 一時、塾を畳んだのはどうして。

幹夫 一九七九年だね。「教育」に失望したのが直接のきっかけかな。今は「半農半塾」だけど当時、五年勤めた紋別の新聞社を辞めて北見で「半工半塾」していた。娘が行っていた小学校のPTAを代表して、市の連合PTAの研究大会で「問題提起」をすることになったんだ。

して大切なことをお座なりにして、はみだしっ子を排除するのが教育と言えるんですか」とね。賛同者は一人もいなかった。口々に「それは理想論だ。自分の子がまだ小さいからそんな甘いことを言ってもらえるんだ」と反論された。PTAに期待したオレが甘かった。

それでね、塾を畳んで、別な、やりたいことをしようと思った。今は国議員になった萱野茂さん（当時は町会議員）に弟子入りして、手足を使ってアイヌ文化を学ぼうか、遠軽の家庭学校（民間の男子教護施設）のお手伝いを家族ぐるみでしようか、それとも百姓の修行をしようか、と。

百姓というのは重たい言葉なんだ。大工、鉄工から土づくり、収穫、加工、保存などなど百通りの姓（かばね）つまり職業に通じていないとできない仕事で「百姓」なんだ。知子 私が百姓をしたいと思ったのは、思ったことを言わずにいられない性分だから。どこかに勤めて、クビになるのが怖くて言いたいことが思い切り言えずストレスがたまるよりは、そんなことを気にせず働いて、思ったことを言える仕事がいいな、と。一番書きたいことは削られてしまう新聞記者をやっている父さん（幹夫さん）を見るのが嫌だね。卑屈にならずに生きて行くには自分

が食う最低限は自分で作ろうと思ったの。それで道東の共同農場に入った。全財産を農場に出して、骨を埋める気で足を踏み入れたのに、四カ月で「夜逃げ」しちゃった。

幹夫 そこは五家族、二五人が財布を一つにして暮らしていた。力を合わせてやる、ということに憧れて入ったんだけど、聞いていた印象と大違いだった。オレが財布を預かり、生活上必要な金を皆で分け合うんだけど、一人ひとり価値観が違う以上、必要な金というのも違う。例えば床屋で髪を切らなければ嫌な人もいるし、オレみたいにかあちゃんに切ってもらえばいい人もいる。

凡太郎 なるほど、トイレットペーパーを使いたい人もいるし、新聞紙で拭ける人もいるし。トイレットペーパーを使えるかどうかは、その人にとっては大問題だよな。

幹夫 オレたちにとつては必要な経験だったと思うね。

知子 「頭でっかち」だったからね。世の中を変えたい、と気持ちばかり先行して、地に足が着いていなかったことを思い知らされたからね。

千裕 知子さんと幹夫さんの関係って素敵だなあ。二人の会話を聞いていると漫才みたいですよごくおもしろい。

幹夫 オレは権威に媚びへつらうことなく生きてる人と付き合うのが好きだね。誰にでも敬意を払って紹介し

なければならぬのが、トモコ大学の鷲頭知子さんだな。一緒に暮らして三十年近くになるけど、二人でいることが本当におもしろい。「とうさん、それ違うんじゃない？」とどれだけ教えられたことか。よく「女性の自立」ということが言われるけど、トモコ学長さんは女性の友達から「あなたは自立していない」と言われるんだ。地元新聞の囑託記者と塾をオレがして、卵と野菜の直売を二人の連係プレーでして、現金を稼いでいる。だけど彼女らの目では、家で畑とニワトリの世話と家事をするだけのかあちゃんは「自立していない」らしいんだ。

知子 そう言った友達みんな離婚しちゃったみたい。「自立」すると離婚しちゃうのかな。

千裕 新聞で、女性弁護士が女性の自立について語っていたんだけど、私の感想は「弁護士さんだから別世界」で終わっちゃったんだ。私も友達に「家事は女性がやる」とは限らないし、結婚退職なんでもってのほか」と言うのと「それは千裕ちゃんが恵まれた環境だから言えるのよ」と返ってくる。私も特別な立場にいるのかな。「自立」って難しいな。

知子 「家事でも何でも自分のことは自分でしなさい。それが自立です」というのが私は納得できない。自分の

身の回りのことさえも自分の手ではできない障害を持つた人っているでしょう。そういう人は「永久に自立できない」と切り捨てられるの。それこそ言葉の暴力でしょう。「自立」を無意識に新聞が使ってしまふのが、いじめの元凶だと思ふのよ。凡ちゃんが考える「自立」について聞いてみたいな。

凡太郎 親父からさんざん「自立しろ」と言われてきたなあ。ぼくが思う自立の条件は経済力、独立心、生活力の三つなんだ。必要な現金を稼ぐ、一人のおとなとして生きる、そして自ら家事をする——。三番目は親父の頭にはなかった。男社会では「生活力」は無視されがちなんだけど、家事って生活することすべてを含んでいるでしょ。ぼくは家庭科を学んで初めて生活することのおもしろさや奥深さを感じることができたんだ。

知子 でもね、私たちが暮らす日本自体が「自立」してない国でしょ。食糧の問題だって、石油だって他国に頼らざるを得ないんだから。

幹夫 その新聞に登場した女性弁護士は、経済的に男に従属せずに生きることを「自立」と表現しているね。だけど、オレはそれが「自立」とは思わない。オレの耳には、賃労働に従事して商品経済の中で金を稼ぐことがす

べてと思っている人のたわごとにしかな聞こえないんだ。

うちのかあちゃんは「バートにでも行けばもつと稼げるのに、もつたいたいね」といろんな人から言われた。家でみそを仕込み、空き地に種をまき、ニワトリを育てるかあちゃんの仕事の価値と比較すれば、オレが塾で稼ぎ出す金なんて微々たるものなのね。「家事」ほど大切な労働を、金にならない無価値な「嫁たる者、母たる者」としてやって当たり前のこととしか考えられないことに、問題の本質があるんだ。

知子 だから私は「自立」しないでいようと思ってるの(笑)。一人でできることって小さいでしょ。おコメを作ってくれる人、それを運んでくれる人……。いろいろな人がいて初めて生きていくことができるんだからね。

凡太郎 だけどね、もし同じことを生徒が言ったら、ぼくは「それは違う。ちゃんと自立しなきゃだめだ」と口に出てしまうだろうな。

千裕 知子さんの話を聞くと、あの女性弁護士さんの話は「私は一人で生きていく経済力は持っているし、夫も家事をしてくれるわ。でもそんな私でも夫にゴミ出しをさせるのは恥ずかしいのよ。オホホホホ……」と言ってるだけでとっても薄っぺらく感じるね。



江口千裕 (えぐち・ちひろ)

1967年北海道遠軽町生まれ。紋別市立紋別小学校勤務。今年初めて家庭科専科を担当。フォーラムの北海道事務局担当。

知子 家事の

仕事は子育て

一つとって

も、お金で換

算できない世

界だよ。

千裕 重要な

仕事なのに世

の多くの男性

は家事を軽視しているし、女性もそれが当たり前だと思

っている人が多い。だから自立には経済力が必要という

議論になるんだと思う。服一枚買うのも夫の稼ぎにお世

話になつていと思うのは私も嫌だから。

幹夫 そうしか考えられないことが悲しいね。ウーマン

リブの運動は「家事労働からの解放」だった。しかしそ

う言う限り、家事労働を評価していないことにかわりは

ない。家事労働の代役を金で誰かに押しつけるのではな

く、「家事労働への解放」こそ本当に必要なんだ。

凡太郎 「解放」というのは「何か『から』解放放つ」

という意味じゃないの？

知子 「解放放つ」と簡単に言うけど、家事労働の世界

は無限に広がっているんだよ。例えば私が洗濯するのに

使う石けんは誰が作っているのか、洗濯したあとの水は

どこに流れていくのか。私にとって家事とは、地球上の

みんながつながりを持ちながら生きていくことを実感す

ることなんだ。

幹夫 オレは奴隷を作らない世の中を目指したい。誰か

を犠牲にしてのうのうと暮らすようなことをしたくない

んだ。そんな世界を実現する最小単位が夫婦じゃないか

な。誰かに押しつけて済ませようとするのでは何の解決に

もならない。

凡太郎 ウチの女子生徒を見ていると奴隷になるのが

「女の幸せ」と感じているみたい。だからぼくは「奴隷

になるな」と口を酸っぱくして言うんだけど、「奴隷を

つくるな」といつても理解してもらえないだろうか。

幹夫 「互いに迷惑をかけ合える」関係が大切なんだ。

「奴隷」と思えば一方通行だし、逆に、この人だけには

迷惑をかけられないと思つたら、すぐ借りを返そうとす

るでしょ。せせこましく考えずに迷惑をかけ合える方が

ずっと素敵な関係だと思う。

知子 ウチは父さんはヘルニアで腰を痛めているし、私

は膝を悪くしている。それをかばい合いながら生きてい



佐藤元治 (さとう・もとほる)
1969年生まれ。北海道新聞社
紋別支局記者。

座談会のまとめは、4人の友人の佐藤さんが引き受けてくれました。大変な作業でしたが、「とてもおもしろかった」と言ってくれたのでちょっと安心しました。どうもありがとう。(凡太郎)

る。脳性マヒの人が東京からウチに訪ねてきたことがあるの。学生たちが交代で手伝いに行つて、一人で暮らしているんだ。手助けに行つたはずの学生たちが、励まされて帰って来るんだよね。彼を「自立していない」と言うことはできないでしょ。

千裕 「自立」を定義するのはやっぱり難しいね。一人では誰も生きていけないんだからね。

幹夫 「自由」という言葉も、ものすごく難しい。「自由」はもともと「自らに由(よ)る」ことを示す仏教用語だけど、咸臨丸で米国を訪ねた福沢諭吉が「束縛からの解放」を意味する「フリーダム」の訳として当てた。

若い人に「自由とは何か」を訪ねると、「人にあれこれ言われないこと」とか「束縛からの解放」のイメージ

が強い。オレは「自分に必要な関係を自分で作ること」、つまり仏教用語の意味こそ「自由」だと思ふね。

凡太郎 「家事からの解放」ではなく「家事への解放」、束縛から逃れるのではなく自らに由る「自由」、刺激的な言葉ですね。しかしほくには腑に落ちないところがあつた。「家事奴隷からの解放」を訴えることも必要。家事をほとんどしない男が多すぎるから。

幹夫 「女だから家事をする」という認識に異を唱えるのはオレも同じ。ただ、オレは「家事はそんなにつまらないことか」と言いたいんだ。家事労働って本気にやろうと思つたら衣・食・住から教育・文化・政治までものすごく広くて深い世界なのに、できるだけ手を抜こうと男も女も考える傾向が強いのはどうしてなんだろう。

家事労働を「束縛」ととらえず「創造の舞台」ととらえられないだろうか。人間が暮らす上で一番の根源となるのは家庭だよ。そこをどう切り盛りするかを考えることほど創造的な仕事はない、とオレは思うんだ。家事だけしている主婦を半人前と切り捨てるのではなく、「家事労働の創造的復権」を考えることが必要だと思うよ。

凡太郎 なるほど、新しい価値観だ。鷲頭さんから「We」に突きつけられた熱い問題提起(ラブレター)だね。

特集

自立の

イメージを

探る

片山洋次郎さん

●インタビュー

「父性」 の役割は トリックスター

聞き手・まとめ
稲邑恭子



「自立」や「多様性の尊重」など、言葉で語り分析できるからそれを実現できるわけではないという当たり前のことに今頃になって気づいた私。ならば私のやりたいのは「自分が自由でいられて相手も束縛しない場」を自分の周りに作っていくこと。お互いの気の流れを感じ取りながら間合いの取り方を体得していく片山洋次郎さん（We95年5月号「複眼で見る」の気功は迷える私のひとつの指針です。（稲邑）

ひとりでしたい

稲邑 片山さんは『オウムと身体』（日本エディタースク

ール出版部）の中で「いじめ」を、お互いに距離を置いたところで付き合わないとバランスがとれない状態にある子どもたちを一つの閉鎖空間に押し込めて集団行動させるから起きる問題だと書いてらっしゃいますね。

片山 「その場所に絶対いなきやならない」というのがなければ、いじめは起きないでしょう。日本の学校は高校以降はまだいいのですが、中学までは相当な閉鎖空間で、そこにしか居場所がないという感じになるんです。全共闘世代より上の旧世代の人は身体的にも出来上がったある種の「構え」があり、精神構造で言えば絶対的価値基準を持っているから、それに合わない情報には反応

しない。

今の若い人たちの身体は情報を洪水のように浴びてしかもそれに敏感に反応するので、硬直した「構え」がないほうがこの情報化社会に適応している。人間関係では密着した熱い関係を回避する。そういう悪く言えば希薄なよく言えばゆるやかな関係でいられることが必要なのに、一日中管理された閉鎖空間に置かれるから、エネルギーがこもってガス抜きを求めていじめに走ることになる。

それでいてどこかに帰属していかないのが不安なのだと思えます。うちの子も小学校の時、二年間くらい学校に行かなかったけど、あとで思い出してそんなことを言っていました。

稲邑 そのとき片山さんはどうなさったのですか？

片山 いや、何もしていませんよ。行かなくていいよと早い時点で言っていただけ。母親はやはり何とか行ってもらいたい気持ちが強くて、子どもが行くというと期待しちゃったりする、そうするとまたその興奮が子どもに伝わってしまう。子どもが部屋に閉じこもるのも、それ以外に居場所がないからでしょう。どこか学校以外に行ける場所があればいいけど、フリースクールという選択肢もあるけど、よほど積極的な気持ちにならないと

行けないでしょう。

稲邑 オルタナティブの教育というのは「いい教育」をめざしがちで、ある種の期待の強さがあるから、「ただの居場所である」というのは難しいような気がします。片山 でも、また、逆にそういうことはある種の思想を持つていないとなかなかやれないでしょう。

「いい教育」をと思うほど窮屈になるんです。そもそも今の社会の中で高い理想を求めようとすること自体が間違っているのだと思います。

その点、塾はいいですよ。勉強教えるだけだから。学校というのは技術を教えるところ、好きなことだけやる、そういうのはいんじゃないか。みんなが集まっていること、きやならないということにどだい無理がある。集団でいることの目的が限定されているならいいけど、生活全体が共同体になっているでしょう。共同体がないのが不安なものだから、取りあえず目の前にある学校にそれを過剰に求めることになっている。

稲邑 そうすると、いじめの防止には子どもたちを一所に閉じこめるのを止めればいってことですね。

片山 確実になくなると思えますよ。それができないのはなぜなんでしょうね。群れていることが正しくて、群

れていないと正しくないという発想がありますね。とりあえず群れていると安心する。

稲邑 ひとりでいると、自閉傾向があるとか、否定的に見てしまう。

片山 ひとりでいられるということ、逆に評価しなければならぬと思うんです。

稲邑 ひとりでいながら外に向かって開いていけばいい？

片山 いや別に開いていなくてもいい。ひとりでいることがまるで罪みたいないいこみがあるでしょう。コミュニケーションをすることが一種の強迫になっている。社会のありかたそのものが集団行動が必要でない社会になりつつあるのに、未だに「みんながやることをやらなきゃ」と思っている。

たとえば、みんな海外旅行に行くけど、ほんとうに行きたくて行くのだろうか、それをやらなきゃ楽しくないはずだという思いこみがあるからやるんじゃないか。よく聞いたらほんとは行きたくないのかも知れない。ほんとは一人でぼーっとしているほうが楽なはずなんです。

稲邑 これが正しいとか正しくないとか言うから強迫的になってくるのじゃないか。自分が心地よいか、心地よくないかで決めればそんなに苦しくならない。

片山 「これを言っていれば正しい」というのは一番怪しいですね。「こういうふうにやっていけば大丈夫なんだ」というのはあるわけない。「絶対正しいこと」があると思っていること自体がおかしいんです。もうちよつとでたためな、「何でもあり」みたいな価値観があればね。日本の中にもいい加減さのよさがあったのだと思うんです。それをうまく使えるようになればいいのですが。

稲邑 すつきりした答えを出してすつきりさせたい。フェミニズムにもその危険性があるのですが、自分の枠内におさまりきれない部分があると不安になって、すつきりさせたいという方向になる。そうじゃなくて……。

片山 わけが分からないことだと認めることのほうが大事なのでしょうね。

言葉に意味がなくなる

稲邑 先ほどのコミュニケーションの強迫に戻ります。が、この前、テレビで小栗康平の話聞いていてなるほどと思ったのだけど、放っておいたらどんどんセリフが速くなってしまふから俳優にできるだけゆっくり話すように指示しているというんですね。距離が近いと言葉が多くなり速くなる、距離が遠くなると言葉数が減ってゆ

つくりした言葉になると。

片山 むりやり距離を近くしてコミュニケーションしなければならぬという強迫がある。その場のコミュニケーションをただひたすら成り立たせるために無意味な言葉をたくさんしゃべる。言葉がどんどん無意味化していく。無意味化しきってしまうと別のものが生まれるかも知れないですけどね。

稲邑 喋ることである種の煙幕を張る。

片山 その場を成立させるために一所懸命喋る。沈黙が怖い。無理にコミュニケーションをとらなくてもいいんだということになれば違ってくるでしょうが。

平安文学なんか語彙が少ないですよ。抽象的な概念が急速に増えてきたのはつい最近のことです。日常生活には要らない。それを無理矢理作ってきたのだけど、それは今の子にとっては必要なものではなくなっている。その意味では元の状態に戻っています。橋本治が枕草子を今の女の子語で訳しているけど、びったりなんです。稲邑 言葉そのものが軽くなってあまり意味を持たなくなっているということですか。

片山 言葉自体に意味はあっても、意味そのものがコミュニケーションには役立っていない。一方ではコミュニケーション

ーションしなければという強迫がありながら、その質が直接的身体的なコミュニケーションに変わってきている。

稲邑 しゃべることが触れることと同じになっている。

片山 いままで有効だった知識や概念が役に立たなくなっている。昔の学生が本を一所懸命読んだのはそれが生きていくために役に立ったからで、また新しく使えるものがあれば残るでしょう。「ケータイ」や「ポケベル」等の間接的なコミュニケーションは距離がある分、楽になれる。身につけられるから身体の一器官のようでもある。それを使いこなすほど、人と人との間の距離もまた広がってゆくことになるでしょう。

自立のイメージ

稲邑 いままで「自立」というと自我がくつきりして自分の価値観ががちりあってというイメージを思い浮かべるのだけど、この頃の若い人を見ているとそれを適用できないような気がしてくるのですが。だから自我を強く固にして戦うやり方だけではなく、ふわふわしたまま自分を守って生き延びる術も必要ではないかと。

片山 そうですね。でも、なかなかそういう存在の仕方は認めがたいでしょう。まだなんと言っても価値観が

つちりして存在感がはつきりあるのが正しいという感じがありますから。

稲邑 私がカウンセリングの勉強をしたときの先生はアメリカ帰りでフェミニストセラピーを始めた人だったから、「私とあなたは違う」という他人との距離の取り方をがんがんだとき込まれたんですね。そのところは日本人の最大の弱点なのでそのことにはとても感謝しているのだけど、その緊張に耐えられなくてユング派の勉強会にも行ってみた。すると今度は混沌を受容する世界だから、面白いのだけど、参加者が質問しているの聞いてもときどき何を言っているかわからなかったりして、こんなぐちゃぐちゃも嫌だと今度はもとの明晰な世界が恋しくなる。それでトランスパーソナル心理学に行くと日本的な暗さも重たさもなく、かと言って過度の緊張を強いられることもなく、笑いと軽さがあつてほっとしたという経緯があるのですが、日本では「一人で立ちながら人とも繋がれる」ようになれるには、まずぐちゃぐちゃの自我を徹底的に明晰にさせるところから始めなければならぬのか、そうやって西洋のレベルまでたどりついてそれから彼らがたどったような同じような試行錯誤を経て、と思うと道が遠くて気が遠くなりそうになるんで

すね。でも、片山さんの講座で「氣」の通し合いをやっていると、自立とか依存とかそんな難しい言葉で考えなくても、体のレベルで、「共鳴しながら巻き込まれない」ことが大事なのだと分かってくる。

片山 姿勢で言えば、前に行くでもない、後ろに行くでもない、弾力があつてどちらにも行けるという感じ。難しいですけどね。

稲邑 「氣」を当てているとき、体の悪いところに自然に手が引き寄せられて、磁場にはまったように手が止まってしまう。そこで、あ、ここだと思わず力を入れたく散らすような手の動きをしろと言うし、一点に視線を集中してはいけない、注視すると流れが止まるから、二カ所を同時に見るようなそこはかかない見方をしろと言うでしょう。普通だったらむしろ止まったところにくぐつと「氣」を送れと教えるのではないかと思うのね。

片山 そうでしょうね。なんでほくのやり方がそうなってきたかという、そういうふうに入力して流れを止めると、僕自身、自分のほうの反応が苦しくなるからなんです。

稲邑 手がびたつとはまった感じの時って、自分のパワーを確認し、支配欲を満たすことができるんですね。イメ

ージワークとかからだに直接触ることで無意識の部分で他人をコントロールするのは、言葉を通してよりも強力な支配だし、やっている側から見るとすごい快感なんだろうなと。人の弱点をつけてがーっと責めていく種類のセラピ―もそうだけど、治療者がはまるというのはよく分かる。

片山 人を支配する快感ってすごいから。

稲邑 テンションが高くなっていく感じですよ。

片山 「支配する誘惑に興奮する。」快感と「ほんとに気持ちがいい」快感との区別がちゃんとできればいいけど。興奮と快感と勘違いする。一方的にやられる側は気持ち悪いですよ。体をもてもらうとき、異常に強い反応があったとき、やっている側が得意になってやられると、やられた側は、人にもよるがすごいいやな感じが残ります。

稲邑 でも、それが快感でついでいく人もたくさんいる。

片山 特につらい状態に置かれている人はしがみついたくなるんです。でも、しがみついてしまうと結局また苦しくなる。支配される甘い誘惑と苦しさの間の往復運動になりがち。恋愛も母性的な支配もそうです。ダブルバインドは強力ですからね。単に怖いだけだったら逃げればいいのだけど。

稲邑 治療やセラピーは共依存にはまりやすいんです

ね。カリスマ性の強い治療家はほとんど例外なくそうだという気が、見ていてしています。

男はもともと情けない

片山 共依存の場合は超母性が支配する場であると言つていいと思うんですが、超母性はそれ自身が甘く強力な支配と破壊のエネルギーに満ちている。だからむずかしい。近づきすぎると超母性の磁場に支配されて出口がなくなる。やっている本人だってほんとは苦しいはずなんです。強い母性というのは反母性的でもある。

稲邑 破壊もする鬼子母神。でも男の側から母親のその面を書いている人いますか？

片山 ないですね。

稲邑 自分の母親の強烈な支配について発言しているのを読んだことあるのは鶴見俊輔と岸田秀くらいかしら。

片山 感じている人は結構いるのだけど、あまり表現する人はいないでしょうね。ジョン・レノンにマザーという曲があるけど、あれは母親は自分を支配したけど自分は支配できないという欠如感を歌っていますね。彼の場合も父親は蒸発しているでしょう。そういう場合はとんでもない父親と言われるけど、「男は強くなければ」というプレッ

シャーがあるのに妻に勝てないから暴れるわけです。

日本ではもともと男は情けなくていいことにされているんです。男が強いのではなくて、男が甘えられる社会なんです。制度に支えられて威張っているだけの話で、これで女が制度的にも強い立場になったら……。

稲邑 いまの若い男の子たちの生きがたさはその所に危機感を感じているから？

片山 そこで「強さ」をあきらめちゃえればいいけど、まだあきらめるところまで行っていないでしょう。今までのものを捨てて何かができていくかというところ、できていくわけではない。

稲邑 父親が情けないのでモデルにならない。どういうふうにするかっていいかわからないと聞きますが。

片山 だけど、モデルがないことは逆に出発しやすいと思うんだけどね。これからやるんだしたら、モデルがないところからどうせ作らなきゃならないから。今、男はどうやって生きていくかどうにもならないですよ。女のほうはずっとわかりやすい。女がモデルを示さないと難しい。父性は……父性ってあるかかどうかも分からないけど、支配力ないですよ。

稲邑 自他の違いを教える人？

片山 社会的規範とかある種の倫理を教えるものではないかもしれないけど、人間を解体してくるような直接的な支配力はないですよ。

稲邑 ただ母性が支配してくる時に間に割って入るものがないと。

片山 家族の中で父親の役割があるとすればトリックスターのようなものですね。見えない権力を茶化したり相対化するような。普通言われているような父性のイメージよりずっと情けない感じですよ。

稲邑 片山さんはお母さんとの関係が大変だったとおっしゃっていましたが。

片山 嫌でしたね（笑）。うちの父は超ワンマンで母を竹刀でひっぱっていたりした。女はあっちこちに作るしね、一般的に考えればひどい親父ですよ。ところがほんとに強いのは母親なんです。そりゃ泣いたりわめいたりはそのけど、何を言われようが暴力ふるわれようが絶対言うことを聞かない。自分では言うことを聞いていると言っているんだけど、全然聞いていない。あれだけ怒鳴られてもよく平気でいられると思うんです。長生きしてるしね。その当時はもちろん母親のことをかわいそうだと思いますけど、今にして思うと、そういうふう

しないといられなかつた父の弱さがだんだん見えてきた。母にはかなわなから、思い通りにならないから、やるわけ。母親のヒステリーの起し方もすごかつたですよ。父に女がいて騒ぎになると、癡癡してひっくり返る。そこまでの状態になれると言うのもすごいなあ、よくやれるなど。父親はそれを見てもうどうしていいか分からなくなる。しかも父が最初に結婚したのは母の姉で、自分の姉の亭主をとっちゃつたわけで、その叔母と腹違いの兄と後で結局一緒に住むことになつたから、家の中のテンションが高い。でも、ある程度年をとつて今振り返るからそう思うわけで、最初からそういうところになるとそれが異常だというのが分からないですからね。

そういえば、いまの核家族も関係が密着していて逃げ場がないと言う意味では学校と同じで大変な場ですね。家庭が安らぎの場であるはずだという安易な思いこみあるいは幻想とのギャップが、多くの悲喜劇を生んでいる。学校を理想の教育の場に！というのもすごく怪しい。

稲邑 ごちゃごちゃ理屈を言わないで、風通しのいい居場所をつくればいいということなのでしょうね。

片山 お互いが一緒の方向を向かなきゃならないとかいうことではなくて、好きな通りにしていただける、そういう

う場があるといい。出入り自由とか、居たいだけ居られる場所。あとは世の中に生きていく必要な技術が在ればいいですから。一番いいのはひとりでいられるのがいい。物理的にひとりでなくてもいいし、経済的自立という意味でもない。家族の中であつてもひとりでいられる。

稲邑 それはある種の能力を必要とするでしょう。

片山 一種の力がある。でも、誰かがそういうふうになればほかの人もなつてきます。ひとりでいることが恐怖なんだけど、それを認めてしまうと意外と楽です。死ぬということの恐怖の元は全くひとりになることです。ひとりでいることは逆に言うとな誰にも縛られない、そのかわり誰も縛らないつてこと。これまでの人と人とのつながりというよりは、人と動物とか人と植物の間のつながりの感じの方が近い。

稲邑 距離をとつていられるということですよ。

片山 拒絶するわけではなく密着でもなく。

稲邑 その感じを体験すれば他でも作れる。いろんなところに作つて行くしかない。

片山 いろんなかたちでそういう場があるといいですね。

特集

自立の

イメージを

探る

男の更年期は なぜ隠されて きたのか



● 宮 淑子

フェミニニストほど男の苦悩を知らない

今年の三月。男たちの更年期を追った『男たちの更年期クライシス』（NHK出版）を上梓した。

「さすが、ジャーナリストの宮さんね。常に時代に先駆けたテーマを追って……」

そんな言い方で、「男の更年期」に着目した私のクク先見の明々を褒めて下さる方がいるが、イエイエ、フェミニニストの私が最初から、「男の更年期」に興味があったわけでは決していない。

昨年がいまごろだった。

「いま、男の更年期の本を書いているのヨ」と告げたと
き、フェミニニストの女友達は口々にこういったものだ。

「へえー、男に更年期なんてあるの。知らなかった。
でも、男の更年期のことなんか、私たちはどうでもいい
心境よね。ご勝手にという……」

そう。少し前まで私も、彼女らと五十歩百歩の考えだ
つたのだ。性差別の告発に端を発したフェミニニズムは、
女の「被害者性」と男の「加害者性」という図式に拘る
あまり、男が背負う問題の具体性については無知であり、
深く知ろうともしないで来た。早い話、男の問題は男が
ヤツテクレ、だったのである。

九五年の十月、キャサリン・マッキノン教授の講演会があった（日本弁護士連合会両性の平等に関する委員会主催）。マッキノンといえば、性差別法、反ボルノグラフィ法などをアメリカで制定させた気鋭のフェミニスト、法律学者である。

その日、マッキノンは夜会風の髪形、ネックラインを大きく開けた黒のスーツという出で立ちだった（あとで関係者に聞いたら、日本ではフェミニストというと、攻撃性向きだしの女性と見られるから、意識してマッキノンはフェミニンに装い、穏やかに喋ったのだという。ナント芸が細かい！）

そのマッキノンの講演は、セクシユアル・ハラスメント、セクシユアル・アビユーズ、売買春など、性暴力の構造（つまり、男の「加害者性」と女の「被害者性」）に肉薄したものだだったが、講演後、男性から質問が出た。

「女性に性暴力を振るってしまふ男性は、いったいどうしたらいいんでしょう？」

「それは、男性たちで考えてください」

彼女の答えに会場は沸いた。ソウヨ、ソウヨ。ココは女性問題を論じる場所なんだから、女の集会にきて、男の問題について発言なんてしないでヨ。男の問題は男自

身が考えればいいじゃない。クメンズリブックでもつくって……。

そんな女たちの本音を素早く汲み取った、マッキノンのク正しいク対応だった。

「女の更年期」でうつ症状になつて

「……新しい発見とは、たいてい、常にそこに存在しているながら、見えていなかったものが、突然見えはじめることです。新しい考え方とは、それまで形を成していなかったものの存在を照らしだす光である」（スザンヌ・ランガールの言葉）

「更年期」という言葉は昔からあったが、フェミニズムを通過した「更年期」の考え方こそ、ランガールのいうク新しい考え方クに入るだろう。ジェンダーから見た「更年期」の言葉のク再発見クともいえるのだが、もつというなら、フェミニズムの担い手が年をとって、更年期まっ只中。他人ごとでなくなったのが大きい。

ちなみにいうなら、あの膨大なセクシユアリテイの記録の『ハイト・リポート』の中で、更年期の項を探そうとしても、ない。あるのは、八章に「年とつた女性たち

の性」として、わずかな記述があるだけ。『ハイト・リポート』は二十年も前の本だから、著者のシエアー・ハイトをはじめ、フェミニストたちはそれぞれ二十歳は若かったわけで、その時期、誰も更年期のことなど思いもしなかったのだ。

無論、私も更年期のことなど思いもしないで生きてきたが、更年期前期といわれる四〇代後半になって、ホルモンバランスが乱れ、人間関係のストレス（そう。この時期に私は恋をしてしまったのだ。臨床心理をやっている〇さんにいわせると、恋は「反理性」といって、熱病になされていく状態なのだそうだから、もうターイヘン）と重なって、くうつ症状クになつてしまつたのだ。

くうつ症状クというのは、「これから先の私の人生はどうなつてしまうのかしら」「この先、元気で仕事をしていかれるのかしら」と、人生のバースベクティブ（展望）に暗雲が垂れ籠め、タコツポに入った感じになることをいう。

生理の前など気持ちが悪くどん底になり、「一人でいると寂しくてたまらないの。助けて！」と電話口で泣いたので、主治医が「いまは更年期で、卵胞ホルモンの出が悪くなっているから、うつになりやすいんだよ。ちょっと

だけホルモン補充療法をやってみようや」となって、「どん底」からやっと這い出せたのだった。

主治医から聞かされた「男の更年期」

ところが、その主治医の山田哲男さん（愛知県常滑市で山田医院を開業。産婦人科医。五十一歳）からある日、電話がかかってきた。

「あのね、患者さんに女の更年期の症状を一所懸命語ってきたんだけど、ある日、その症状が全部自分にあることに気がついたんだよ。肩凝り、腰痛、めまい、寝汗、イライラ、うつ……すべてあるからね」

山田さんは、自然分娩でお産を三千例ぐらい手がけてきたのだが、五〇歳を間近にして腰痛で倒れ、もうお産はできない身となった。これからの病院経営をどうすべきか……と思索するうち、「男の更年期」症状をきたしてしまつたというのである。

男にも、女と同じように更年期があったのか。それなのになぜ「男の更年期」は隠されてきたのか。ないものとされてきたのか。その疑問から私の「男の更年期」をめぐる取材は出発した、といつていい。

オイソレとはいかなかった出版企画

ところが本書を刊行するまで、難儀な作業が続いた。いままで私の本は、担当編集者がオーナーを兼ねている中小出版社から出版されてきたから、本を出したいという著者の意思と編集者の意思が合いさえすれば、いとも簡単に本を出すことができた。

が、今回はテーマがテーマだけに、大手の出版社から出したいと気負ったため、オイソレとコトが運ばなかった。編集長の意思や営業サイドの意思だけでなく、部長会議、局長会議といった、意思決定機関の決済を待たねばならないのだ。二重、三重の関門が待ち受けていた。それに、「更年期」（企画提出時では、「女と男の更年期」とするつもりだった）は、医療の問題だという常識が出版界に横行しており、医療の問題なら、専門家の学者・医者、それも権威や肩書のある学者・医者に書いてもらいたいとなる。

「でも、考えてみて下さい。彼らは男として専門家として、権威の衣を着て生きている（いられる）わけだから、目の前の患者さんの抱える病み、とりわけ、ウジエソダーの病み々などには無頓着ですし、治せるはずもな

いのですよ」ということを、どれほど口を酸っぱくしていったことか。

最初に打診した大手のK社の場合。この企画に熱意を示してくれた編集長と、企画書を練り直すこと三度。そして、々ただいま男の更年期々の人間が大部分を占める営業会議はスンナリ通ったのだが、々とづくに更年期を過ぎた世代々（つまり長老たち）が集う局長会議では、「男に更年期なんてあるはずがない」「素人が書くこんな本は売れない」という理由で、あえなく却下されてしまった。

その間、六カ月余り。期待と失望の間を行ったり来たりするから、ストレス性の下痢と不眠状態が続いた。アメリカのフェミニニストの友人から、「アメリカではメノポーズ（更年期）が社会的話題で、本はベストセラーよ！」と聞くたび、その文化的土壌の違いを何と羨ましく思ったことか。

あらゆるコネを動員して、NHK出版に決まったときは、企画段階から優に一年は経過していた。折しもアメリカでは、男の更年期をめぐるホルモン補充療法の話題で沸いていたから（「ニューズ・ウィーク」既報）、そのニュースが追い風になってくれたらしい。本のタイトル

も、新鮮さのある「男の更年期」で行こうとなった。

男は自分のことは語りたがらない

取材についていえば、「男の更年期」を語ってくれる男性が非常に少なく、難儀した。

無理もない。若さ、強さ、健康、性的能力こそが「男らしさ」だ、と思わされてきた社会である。更年期を認めることは、自分の弱さや老いを認めることになり、いままでも築きあげてきた「アイデンティティ」が崩壊しかねまい。そうはしたくない心理規制が、ひそかに働くようになった。

しかし、「男の更年期」はまぎれもなくあった。

仕事（業績、地位、名誉、金）だけが生きがいと思ひ、企業社会の歯車の中で頑張る中高年男性たちの上に。長時間労働やサービス残業でからだは悲鳴をあげているのに、「男なら弱音を吐くな」という呪縛のもと、ストレスを溜め込み、過労死、自殺に追い込まれて行く男性たちは、まさに更年期の「症状」を出しているといえ、リストラ解雇された男性を襲うククつ症状々は、更年期特有の症状だともいえた。

リストラ解雇された管理職が個人加盟する「東京管理職ユニオン」で、「毎日がク日曜日クです。することもない状態って辛いですね」と、肩を落としていた背広姿の男性。

「夜もよく眠れないんです。何でこのオレがリストラなんて……と思うと、イライラの感情が込み上げてきて……」という男性たちは、その辛さ、しんどさを、最も身近にいる妻には一番言えなかつたと言った。

「妻に言えたら、もう怖いものなんてないんですが、男は心とからだの問題を誰にも……妻にも、むしろ友人にも、話すことなんてできないですからね」というのだ。見栄を張らず、感情を素直に吐き出せる「自助グループ」がこれからは欲しい。とりあえずは「管理職ユニオン」が代行しているけどね……といい合う男性たち。

「強くなれ」「負けるな」「勝て」「泣くな」「がまんしろ」といわれて育ってきた男たちは、気持ち・感情を素直に相手に伝えるのが苦手だということ。感情表現をしなくなると、次第に感情の起伏が小さくなり、自分の気持ちかわからなくなってしまうこと。だから、一般論を話すときは平気なのだが、自分のことを話すのは苦手なのだということをクメンズ・リップクを標榜する関西や東

東京の男性たちから聞くまで、私は男の心の内奥やコミユニケーション下手など、ほとんど知らずにきていたのだ。

性機能の変化を男は一番認めたがらない

こうした仕事を巡る問題のほかに、子どもの自立、妻との不和、熟年の恋、家庭内離婚、親の介護、老い……といった問題を男性たちは抱え、更年期のクライシス（危機）を迎えていた。それを更年期とは知らずに。

男性が「更年期」をシカと自覚するのは、加齢に伴うホルモン分泌の変化で性機能が変化する……性感の減退やインポテンスという現象がある……ときのように、更年期の勃起不全の男性に、「補助用具」、あるいは、媚薬、精力剤という安心材料を与えているのは、もっぱら巷の男性週刊誌の広告であった。

「勃起しなければ男ではない」という囚われ、挿入―射精―挿入―射精が男の性であるという囚われ……ヒューマン・セクシュアリティの第一人者で、『男性解体新書』（大修館書店）の著者である村瀬幸浩さん（大学講師。ク人間と性ク教育研究協議会代表幹事）は、これを、

「勃起幻想」という言葉で表現する……から解放されない男性の何と多かつたことか。

更年期を「性成熟期から老年期への移行期」と再定義するなら、男の更年期も女の更年期もそう違わないのだから、たがいに相手の更年期を「よく知り合い」、労りと優しさでもってこの時期……人生の仕切り直しの時期……を乗り越えていくことが先決だ、と取材をしてみたものだ。

それにしても出版後、拙著は男性中心のメディアでは、ほとんど無視されている。なぜ、社会的話題にされないのかしら……と、さきごろ、月刊誌『潮』で対談した漫画家の黒鉄ヒロシさん（拙著の帯に推薦文を書いてくれた）に聞いて見た。

彼曰く。「男はモヤシのようにひ弱い人間で、それを見せまいと鎧をつけて生きています。その男文化の欺瞞性を暴くのが更年期ですからね。更年期って文化なんですよ。だから男の文化にとって、更年期はク劇薬クそのものなんですよ」

そうか。男の文化にとって更年期がク劇薬クならば、できるだけ近寄りたくない、遠ざけようと男たちは思ってしまうことだろう、と妙に納得してしまっただが……。

特集

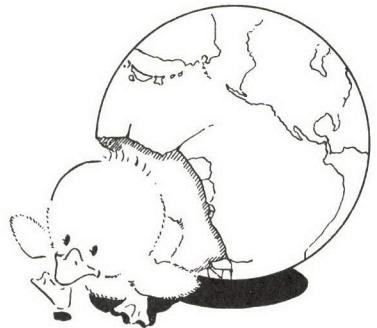
自立の

イメージを

探る

みづいアヒルの子が世界を散歩

許 家玉（キャロル・ホイ）



神様がもし五歳の子供に「チョコ牛乳か国籍のどちらかを選びなさい」と命令したら——。

私が五歳のある日、両親と姉がフィリピンへ旅行することになった。この時私は国籍がなく、パスポートというものが取れないため一緒に行けなかった。でも、香港で留守番するのだから充分楽しい。チョコ牛乳はお菓子扱いでめったに買ってもらえないものなのに、それがなんと、三本も冷蔵庫に並んだのだ。いつも姉と半分こだったペーシューさん、この三日間は私一人だけの遊び相手——振り回した、振り回した。

目に見えない「国籍」なんてものがなかったから、み

んな私にこの三日間こんなに優しいんだ。お姫様気分のは、チョコ牛乳の最後の一滴を味わいながら、「永久に国籍なんて欲しくはならないな」と思っていた。

私の出生の事情

当時香港に住んでいた日本人の母は、私を身ごもったとき、出産のために一時帰国した。もちろん普通の日本人のように「国籍」のことなんて考えてもいなかった。問題は、私が無事に東京で生まれて戸籍を登録しようとして初めて姿を現した。当時の法律では、日本国籍は男親からしか子に継承できなかったのだ（この法律は一九八

七年に改正された。母は私のためにいろいろな役所を駆け回ってくれたが、私が生まれたことを、ついにどこも登録してはくれなかった。

国民として、日本の女性は男性と同じ権利を持っていない。信じられないような話に聞こえるが、それが私の出生の事情であった。日本は、粹に綺麗に収まらない人の存在を認めない。——でも、たとえ生まれたことを認

められなくても、その子はそのまます人間として育ててゆくのだ。

私の父は中国の広州生まれで、共産党の革命の時に家族と香港へ移住した。当時、台湾は中国から逃げた人のすべてに国籍を発行していた。しかし、後に台湾も国家として安定してしまい、一度もその国に住んだことがない父から私達に国籍を引き継ぐことは出来なくなっていた。香港生まれの姉が持っていたのは一九九七年という期限付きの「消える国籍」

——すなわち英国の植民地パスポートであった。返還とともに香港市民は英国人として認められなくなるためだ。

国民としての権利の中途半端な私達一家は、一九七四年にカナダへと移民した。

香港に住んでいた頃、両親は私たち姉妹の憧れの的であった。私たち姉妹は祖母や住み込みのベビーシッターに育てられた。母は航空会社のキャリア・ウーマン。研修ではドイツに飛ぶというグラマのママ。父は建築会社の副社長で、週末ともなれば面白い所へドライブに連れ



カット・秋山 浩

て行ってくれた。その上、友人達と結成したサッカーリーグではストライカーという、まさにヒーローだった。こんな憧れの親と水入らずで暮らせると思うと、私はカナダで始まる家族四人での新しい人生にワクワクしていた。

国籍の謎

生まれて初めて国籍を手に入れたのは一九七九年。十一歳の時であった。でも、不気味な顔写真が貼られた紙切れ一枚に、とくに何の感慨が湧くでもなかった。下って一九八七年、日本人女性の子供も国籍を持てるよう法改正がされた時、すでにカナダ国籍があったため、今さら面倒臭い手続きをしなくて済んだのは確かにありがたかったが……。

しかし、国籍の必要と親の愛を実感したのは、一九八八年のバンコク旅行中、あるクラブでタイ人女性に間違えられた二〇歳のときだった。

アメリカ人の男友達二人と座っていたら、あるタイ人女性が私たちのテーブルにやって来た。私に向かってタイ語でしきりに話しかけてくる。「分かりません」と何度繰り返しても、彼女はイライラするばかり。でも、言

葉は通じなくても、態度から彼女の言いたい事は簡単に分かった。二人も客を独占するなんて狡いではないか。一人、譲りなさいよ。南の島で日に焼けた私は、誰がどう見てもタイ人以外に見えようがない。

この時、カナダのパスポートだけが私と彼女の違いなのだと思った。もし、パスポートをなくしたりしたら、自分がカナダ人だと、どうやって証明するのか。このときパスポートを握りしめ、その大切さを痛感した。

香港からカナダへ

一〇代の頃、私は東洋人差別の国に住むのが大嫌いだ。何故カナダみたいな差別される所へ住むことにしたのか。他人に「つり目の悪女」などと呼ばれたりもした一〇歳の時、毎晩寝る前のお祈りは「朝起きたら金髪になっっている」ことだった。そして、同じ肌の色のアジアに行くのが大好きであった。でも国籍の謎が解けた瞬間、親への感謝の気持ち溢れた。

香港での楽な生活を捨て、両親は他の誰でもない、私のために新移民の苦勞を選んくれたのだ。長年頑張ってきた親の姿が、頭の中で甦る。母はシツクな航空会社の制服姿から魚臭いコート姿に変身した。英語力が足り

ないために、日本人経営の魚工場の一般事務しか仕事が入らなかつたのだ。なのに、「ママの洋服はいつも臭う」と嫌がつてた自分が申し訳ない。私のために臭い思いをしてくれたのだ。

そして、父。建築会社の副社長から肉体労働へ。こぼれた彼の汗が思い出の中で光る。建築現場が当時住んでいた家から近所だったので、夏休みには昼間でもパパと会える贅沢があつた。お小遣いを貰つてコンビニまでジュースを買に行つた。眩しい太陽の下でパパと一緒に飲んだコーラの味は最高だつた。

経済的な余裕がゼロの時でも、一度も貧乏な思いをさせられたことなどなかつた。テニスラケットが欲しいと言えば、ジュニアの一番良い品物を買つてくれた。あの時のリッチな気分は未だに忘れない。感謝、ただ感謝の涙ばかりがこぼれてきたバンコクの旅行。その気持ちを早く親に伝えたくてペンをとつた。あの気持ちは今なお薄れることはない。

家族の力

私に国籍がないのは誰の罪でもないのに、私の将来のために安定を捨て、新移民としての辛い道を選んでくれ

た家族たち。みんなが助け合い、頑張るこの家に生まれ、本当に良かった。

先日、夫と大学時代の話をしていて、「ほら、学生には責任がないじゃない」と言われたが、一二歳の頃からベビーカーで一〇歳年下の弟を連れ、バスを乗りついでデパートへ行つていた私には「学生は責任がない」など、考えもつかない。

小学校五年生の時、私の家族はレストランを経営していた。休みの時には必ず親の店の手伝いに行つた。皿洗いが専門だが、テーブルの掃除やコックの手伝いもやつた。みんなに「この子はよく働くねエ」と言われるのを誇りに思いながら、家で弟のお守りに頑張っている姉が人から誉められないのが残念だつた。暇な時は、宿題を片付けたり、女性探偵の推理小説をエンジョイしたり。家族と一緒に頑張ることは子供にとって決して悪いことではない。実はその時が何よりの幸せであつた。何をやるかに関わらず、子供は親と一緒に時間を過ごすのが一番なのだ。

「本当の自分」を追いかけて……

一〇年以上この地球で無国籍として生きていた私に

は、国境というものがない。

と云って、国際人が良いことばかりなどということとは決してない。あつらえの枠というものがなかった私は、常に居場所を捜し、みにくいアヒルの子のように渡り歩き続けなければならなかった。三年前など、一年間に四カ国にも住んだ。いろんな人達との出会いは、それはそれで素晴らしく、有り難いものだが、柵も囲いもない浮き草のような私は、流れ、こぼれ続け、なかなか自分の生き方に芯を見いだせなかった。

でもある時、幸せとは地理によって変わるようなものではなく、何処であつても自分の中にそれを見つけられるものなのだとか閃いた。そのことを実感し、ようやく、逃げ水の幻を追うような浮き草の生き方にはじめをつけることが出来た。そしていろんな事情から、私は今東京に住んでいる。

両親は、新しい国でゼロから自分の夢を追いかけた。父は一〇年前に夢を叶えて、現在はバンクーバーで建築会社を営んでいる。母も起業家となり、数年前から日本人相手の「手作りイベント会社」を始めた。こんな親を持つ私なのだから、どこに住んでも幸せになれるチャンスがある。

これまでの人生で失敗の経験が多い私は、結局白鳥にはなれず、そしてまた白鳥の居場所も見つからずじまいだったが、みにくいアヒルの子として「本当の自分」を精いっぱい考え、追いかけることはできた。

憎まない。諦めない。現実をより良く変えるのは自分の責任なのだとして示してくれた両親。幸せになるのが一番の親孝行だと信じている。

こんな自分の経験を通じて「女の力」や「家族の力」、「自由」や「幸せ」について、これから何回か書き綴ってゆきたい。

(つづく)

キャロル・ホイ 一九六八年生まれ。カナダのプリテツシユ・コロンビア大学の社会学部で「性、人種、経済差別」を専攻。一九九一年、東京「ジャパン・タイムス」編集部に入社。以来香港やアメリカの英字新聞を経て、現在フリーのライティング活動とともに、英字雑誌「アジア・マガジン」の東京特派員、ジャパン・タイムスのコラムニストを勤める。また、カナダの一般電話相談カウンセリング、女性のレイプ／暴力カウンセリング、カナダ厚生省でのチャイルドケア・ワーカーなどの経験もあり、香港では「Arts for Health」会でダウン症の子供のダンスセラピーを手伝っていた。

フェンスを超えて

小平陽一

あー、つまんねえの何のって！何なのこれ？質問もなく、意見もないシャンシャン大会。これじゃー、家庭科が良くなるはずがない。

県高等学校家庭科研究会というのがある。その総会と研究協議会が年に一



度、県下の家庭科の先生が一堂に会して行われる。家庭科研究会長だの、家庭科校長会長だの、それから学校家庭クラブや全国家庭科研究会（ZKK）の幹事やら成人会長（あー、舌噛みそう）の挨拶が続く。いずれも、他教科出身の男性の校長だ。どれだけ家庭科がわかってる人々なのか、心許ないのだけど、もう少し何とかならんのかと思ってしまう。こういうポストって家庭科の顔でしょー？それに何で他教科の校長を持つてくるわけ？男を立てる伝統？家庭科出身の校長がいなくていいじゃない。

だいたい、学校家庭クラブってのが怪しげで、どうにも理解しがたい。その成人会長って名称も今時ねえ。僕にいわせりゃ化石にしか思えないんだけど。「勤労」と「奉仕」なんていまだに言っている世界で、戦前戦中の「大

日本帝国……婦人会」というイメージすら思い浮かぶ。その嘘くささを感じないのだろうか？

この会場にいるだけで、時代を遡った異次元世界に迷い込んだ気分で、どうにも居心地が悪い。建前が羅列され、言葉ばかりが上滑りして、文部省が「生きる力」と言えば、右へならえて、誰もがその言葉を口にする。そして、中身はさっぱりだ。

研究発表もねえ？現実の授業では、生徒の反応にみんな悪戦苦闘しているはずなのに、生徒は興味関心を持ったのだの、熱心な態度だったのだの、体のあちこちが痒くなるだけで、感動がない。どうして家庭科の先生は本音で語ることをしないんだ！悩んでることをぶつけ合わないんだ？馬鹿な僕が一人つまらない質問したけど、答えてくれた指導主事は、僕に目すら合わせてはくれなかった。（こだいら・よういち）

私の家庭科



香川 恭子

計画のない実習をしたい

家庭科の年間計画……ここ数年いわゆるきちんとして計画を立てていなかった、というのが本当のところですよ。年間の大きな目安は立てるのですが、その目安にとられて、せっかく子どもたちが興味を持ち目を輝かせて取り組んでいることを、時間の都合で中断させてしまうことがあります。このことが私の悩みの一つなのです。計画を立てると、子どもの意欲や関心を無視してこちらの都合で進めてしまいがちになる。かといって限られた時間の中でやっておきたいことがある。みなさんは、そのところをどのようにクリアしていますか。私はあま

り計画を立てない、計画通りには進めない、子どもを中心に進めるをモットーにしてクリアしようと心がけました。その結果、きちんとした計画はないということになってしまったのです。

違う教科書を作っているだけ？

自分の思いが強いと、一方的に結論を押しつけてしまうことが多くなります。暮らしの中の知恵や文化を伝えたいものだから、一所懸命資料をそろえて教えようと思います。でもちょっと待って、「これってただ単に違う教科書をつくっているだけじゃあない？」。そう思ったと

き私は別のやり方を探し始めました。そこで昨年、家庭生活でやってみたのは、次のような方法です。

- ① 自分が授業でやってみたいことを整理する
- ② 生徒に授業でやってみたいことをあげてもらう
- ③ ①と②を調整し、ある程度の時間配分をする
- ④ ①を基本にした枠組みの中に②の内容を取り込みながら、材料を投げかける
- ⑤ 生徒が工夫し発展させていくことができるだけの時間を確保する
- ⑥ 生徒が発展させたものを一緒にまとめていく（こ
うあるべきというまとめはしない）

非日常的な組立はヤメにしよう

今年「食物」を半年、クラス交替でおこなっています。教科書通りに流せば、栄養？を学び食品の特徴を学び調理の進め方を学んだうえで実習をしましょう、ということになります。しかし、日常生活を考えたとき栄養を学んでから料理にとりかかるとはならないわけで、そんな非日常的な取組はやめることにしました。とにかくまず作ってみる。そんなことから始めてみました。

作りながら感じてみる

お米の料理……なべで白米を炊きます。電気に頼らず

にごはんを炊くことができるようになろう！という実習をします。翌週はお米の栄養素のことを調べながら、玄米ご飯の試食をします。試食してみて感じたことを大切に、お米の文化にも少々ふれてみます。

野菜の調理……玄米の試食をしたときに、白米と玄米の粒の観察をします。すると、胚芽があるかない、表面に茶色いもの（ぬか）がついているとこない、の違いに気づきます。そして、胚芽やぬかに含まれるビタミンやミネラルがどんなふうにも人の身体に役立っているのかを調べながら、ビタミンを豊富に含む野菜にたどり着いて行きます。そこで野菜を使った調理に挑戦します。これは結構大変です。野菜にはいろいろな種類があつて、調理の仕方もそれぞれに違います。最近行った料理実習で豚汁を作った時、作り終えた生徒たちがいつまでたっても食べ始めないので、どうしたのか尋ねたところ「疲れた、たいがい」という返事。漂う空気も、もう食べる元気も残っていないという感じ。今までほとんど扱ったことのない野菜を調理するのは、ことのほか大変なようです。材料の野菜は近所の八百屋に配達してもらい、私が配分まで済ませ、ただ作るだけなのに、それでも肩で息をするほど疲れるようなのです。私の夢は畑を作つてそ

ここで野菜を栽培し、その野菜を使って調理すること。でも、そんなことしたら生徒たちはくたびれ果てて、きつと家庭科嫌いになることでしよう。もつと時間のゆとりがないと無理ですよねえ。

肉や卵の調理……肉を取り上げるときは、『美味しんぼ』の〈舌の記憶〉か、タイトルは忘れたけど牛肉をテーマにした回のビデオを観ます。その後平飼いの卵や肉を使った調理をします。今まで家庭で食べていたものとなんか違うということに気づく子どもたちが結構いて、「これが、元気な鶏から産まれた卵かあ！」と感動している様子。〈舌の記憶〉ではないけれど、「あの時のあの味をもう一度」と思い出してくれるといいなあと思っ取入れていきます。《舌の記憶……呆けの症状があるおばあちゃんが鳥鍋が食べたいと言うのでお店に連れて行った。しかしこの味ではないと言う。まわりはわがままだというレッテルをはったが、実は鶏肉そのものがブローラーの肉で、昔の味とは違っていた。そこで平飼いの鶏を農家でもらってきて鳥鍋にしたところ、おばあちゃんが元気になったというストーリー》

百聞は一体験にしかず

作ってみると食べ物の栄養素のことや性質など、いろんな面が見えてくるようです。例えばソーセージを作ってみると食品添加物のことがよくわかります。見た目も味も舌触りも市販のものとは違います。「百聞は一体験にしかず」。百回説明を聞くよりは、まず一度やってみると、いろんなことがわかります。また同じ体験をして、受け止め方がいろいろ違うのも面白いですよ。

こんなこともやってみました

前回、技術と家庭を1時間ずつやっているという東京都の中学校のことを藤原さんが書いておられましたが、広島ではたいいのところ、半年交替で家庭科と技術を行っています。家庭科は、一年生で「家庭生活」、二年生で「食物」、三年生で「住居か被服と保育」を行っているところが多いようです。「家庭生活」ではWe（九六年一月号）に書いた「自立」や「家族」について学習し、グループで家族をつくってから「そうじ」や「せんたく」や「調理」をします。おままごとの延長のようですが、これが結構楽しいらしく、「家族の朝食づくり」というところでは、グループで作った家族の好みを取り入れたり、高齢者がいるからと、柔らかいものを取り入れたりしています。ま

た「室内の清掃」では教室の中や廊下の汚れ調べをし、家族会議を開いて掃除の仕方を研究し分担してから作業にかかります。これらを一通り終えてからは、家族を解散して「家庭の経済」について学習します。ここでなぜ家族を解散するかというと、お金に関しては既に多くの生徒が多額の買い物をするようになっていたので、個人で取り組んで欲しいからです。

賢い消費者になるために、いきなり最初に「契約・悪徳商法」などの学習から入ります。どの子も電話による塾の勧誘や訪問による教材セット販売の経験がある（契約してなくても）ので、かなり問題意識は喚起できるようです。そして次に、今自分が一番手に入れたいものを賢く購入しようというテーマで各自が取り組みます。商品の種類や品質・価格（店舗による違い）や支払い方法・サービスなどを徹底研究して、自分が一番よいと思った方法をレポートしてもらいます。その際に、私は情報の質の違いに気づくよう、テレビコマースや雑誌の広告欄を見たりして、そこから得られる情報が誰のためのものかを考えてもらっています。特にこちらが説明しなくても、「いいところばっかり宣伝して、本当に知りたいことは全然知らされていない」ことに気づき、

取り組み方が急に熱心になったりします。

家庭科は面白い！

こんなことで、私の場合は結構やりっぱなしの授業も多く、まずいかなあとも思うのですが、生徒たちが「次は何やるの？ 次は○○やろうよ」と楽しみにしてくれています。とりあえず一年生では「自分で掃除したり洗濯したりご飯を作ったりすることが面白いよ！」と思える」ことが目標です。ああ、そうそう忘れてましたけど、調理の後にはゴミの捨て方をやって、環境問題に広げていくのですが、昨年ドイツの緑のマークのことを紹介したら、多くの生徒が自主的にそのマークを見つけてきてくれて、日本の製品のパッケージとの違い（日本は不要な箱や紙包みが多い）に気づくことができました。家庭科は基本的に「暮らし」をテーマに男女が共に学ぶ教科ではないかと思っています。暮らし方には決まりはなく、よりよいと思われる方法を見つけてくれればよいと思っています。ですから見つけていくためのきっかけや材料を提供できればいいかなあと考えているので、私はあまり肩肘張らずに授業を進めることができます。もちろん以前は欲張って肩肘張ってましたけれどね……。

風がかわる
匂いがかわる

インターネット接続！

機械音痴の私が、三ヶ月間苦勞に苦勞を重ね、ついにインターネット接続を果たしました。何か授業で使えそうなネタはないかと「高齢者」をキーワードに検索していたところ、「やまのいくらぶ」というホームページに出会いました。それは偶然にも、授業の参考文献に使わせていただくと思っていた『世界の高齢者福祉』（岩波新書）の著者、山井和則さんの開いているページでした。

あるある、授業で使えそうなおもしろいネタが、ごろごろと……。 「福祉用語集」から「福祉の現状」「介護の際の男女の意識差」、はたまた「諸国漫遊記」まで、高



ホームページを利用して

— 高齢者を取り巻く諸問題

…………… 立川仁美

高齢者福祉に関する最新情報が、ずらり……。

ホームページ紹介

まず、タイトルページには、高齢者福祉の「現実」と「未来」という項目があり、「現実」の方をクリックすると、日本をはじめ、世界の高齢者福祉の現状が紹介されています。「日本の福祉サービスの現状」については、山井さんご自身が、特別養護老人ホームへ体験入院され、それに基づき、「寝たきりオムツ体験記」が綴られていました。ご自身の体験をもとに書かれているだけに、かなりインパクトの強いものでした。

また、「介護の際の男女の意識差」について述べられているページもあります。女子学生と男子学生数十名に「介護が条件にあつたら、結婚をするか、やめるか。」という質問に、答えてもらった結果、男女では、意識に随分差があるということがわかったというものでした。介護に関しては、女性の方が、自分自身の切実な問題として捉え、男性の方が、安易に「介護は家族で」と思っている傾向があります。

また、「諸国漫遊記」では、アメリカ、イギリス、デンマーク、シンガポール、スウェーデンの高齢者福祉の現状が述べられています。そして、「未来」をクリックすると、「望まれる高齢者福祉の未来」について紹介されています。「二四時間ホームヘルプ」「グループホーム」「デイサービス」「老人保健施設」などのページがあり、これらについての説明と訪問記などが記されています。また、ドイツの公的介護保険について紹介されているページもあります。さらに、スウェーデン図書館ネットワークでの図書の検索もできるようですし、夕刊紙も見られるようですが、横文字ばかりでよく理解できませんでした。パソコンを壊してしまうと大変なので、このページには、触らないことにしています。

「諸国漫遊記」、ゴールドプランとの比較

「諸国漫遊記」に登場するスウェーデンでは、高齢者が、できる限り自立して、人間らしく生き生きと暮らしているように、制度的に保証されています。一方、「日本の福祉サービスの現状」というページには、寝かせきり高齢者や、ベッドに縛られている高齢者が登場します。このような差は、マンパワーの差として現れているのではないかと思ひ、北区役所で「地域保健福祉計画」の詳細を手に入れ、スウェーデンと比較してみました。

まず、福祉計画の目標年度（二〇〇二年）には、具体的にどのようなサービスが受けられるのかについて『北区地域保健福祉計画』の「サービスの目標量」を見ました。そしてこれらのサービスを実施するためには、どれくらいのマンパワーが必要となるのか。『北区マンパワー対策検討委員会報告』の内容を検討し、目標年度におけるホームヘルパーの数が、どのような計算に基づいて算出されたのか確認しました。そして最終的に、ヘルパー一人あたりの高齢者数を算出し、スウェーデンのホームヘルパーの数と照らし合わせてみました。

「今日は、計算問題をやります」「えーっ、何で家庭科の時間に数学やるの？」あちこちから不満の声。「数学

じゃなくて簡単な算数だよ」「俺、計算苦手」「大丈夫だよ、私なんかそろばん7級を3回も落ちたもの」「先生、それって、すげえ自慢になるよ」「だから自慢しているんでしょ」「などと雑談しながら、強引に計算問題に入ります。

要介護高齢者、痴呆性高齢者の出現率等を参考にして、ホームヘルパーの必要度から、福祉計画におけるホームヘルパーの数を算出します。「必要度って何を根拠に計算したものなの?」「スウェーデンとどうしてこんなに差があるの?」「先生、その計算、小数点がずれてるよ。」「珠算検定は3回であきらめちゃダメだよ。俺、6級は4回目で受かったよ」「日本は家族の絆が強いから、家で介護するんだよ」「子供の数が減っているんだから、家族だけじゃ無理だよ」「中国は、一人しか子供産めないんでしょ?」などなど、それぞれが口々に、思い思いの発言をしてくれます。

珠算検定合格の方法から、少子化の問題、果ては中国の一人っ子政策まで、ここまで来ると、こちらもバニック状態に陥ります。とりあえず、計算式についてだけまとめて、その他の問題については、次回にまわすことにします。

ベッドに縛り付けられている高齢者が登場する箇所
で、生徒は、かなりのショックを受けたようです。大まかに分けて二通りの感想がありました。「どんな理由があるにせよベッドに縛り付けるなんてひどい」と介護職員を非難するもの。「縛り付けなくてもいいように職員を増やす」と福祉の充実を望むもの。

いずれにしても、今後の高齢者福祉について真剣に考えるきっかけになってくれるとよいと思います。

「介護の際の男女の意識差」を読んで

このページは、そのままプリントアウトして配り、感想を書いてもらいました。

意外にも「親孝行」的な意見が男子に多かったのには、驚きました。「自分を育ててくれたのだから、親の面倒を見るのは当たり前だ」「女子学生の、夫の親を介護するなら、結婚をやめるといふのは、わがままだ」「老人ホームに自分の親を入れるのは、かわいそうだと思う」「自分は長男だから、親の面倒をみる責任がある」「家族みんなに高齢者をいたわる思いやりの気持ちが必要だ」

一方、女子では、「自分が歳をとってから、高齢者の面倒を見るのは辛い」「この女子学生と同じように、結

婚をやめるかもしれない」「自分の自由な時間が、すべて介護だけにとられるのは、嫌だ」というように、一見、男子に比べてわがままな意見のようですが、自分にとって切実な問題として捉えているのだと思います。

さらに女子では、「在宅介護もお金がかかるし、家族だけでは、大変なので、介護サービスやヘルパーを増やして欲しい」「国が、汚職ばかりして無駄にするお金を福祉にまわせばいい」と、福祉の充実を求める意見や、「地元でボランティア活動が盛んになり、近所づきあいが増えれば、孤独なお年寄りが減るのでは」と、自分たちにもできるところから参加しようという前向きな意見も多くみられました。

本校では、女子の在籍数が男子よりかなり多いので、単純には比較できないと思いますが、介護に対する捉え方には、やはり差があるように思われました。

いずれにしても、高齢社会を支えなければならぬ世代として、真剣に高齢者の問題を捉えているようです。高校生にとって、「高齢者」とは、遠い存在でしかないと思っていました。うれしい誤算でした。

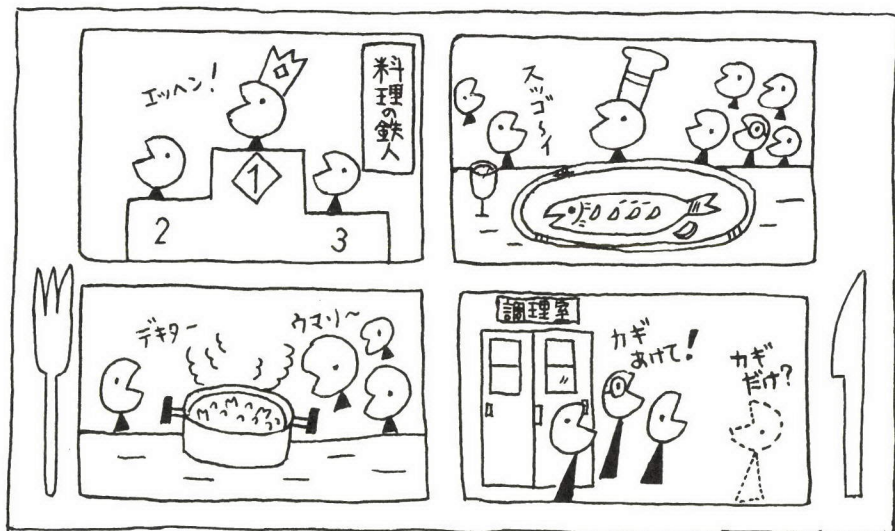
今後の高齢者を取り巻く様々な問題を考える時、自分の家族だけに目を向けるのではなく、社会全体で、高齢

者福祉をどうしていくのかという視点に立って、この問題を捉えていくことが必要ではないかと思えます。「親孝行」的な意見も大切にしながら、将来的には、彼らにより広い視野を持って、この問題に取り組んでいくことを期待しています。

家庭科にはタイムリーな教材が必要

家庭科を現場で教えるようになって、まだ一年と数カ月ですが、タイムリーな教材の必要性を強く感じています。ちょっと立ち止まってポーツとしていると、世の中はどんどん流れていってしまいます。若い頃なら、資料集めにあちらこちらと歩き回るのも苦ではなかったと思いますが、最近は体力も衰え傾向のようです。自宅に居ながらにして、最新情報を手に入れることのできるインターネットは、大変便利です（東京都も自宅研修を認めてくれると嬉しいのですが……）。今のところ授業で使えるようなホームページは、「高齢者」の分野しか見つかっていませんが、他の領域についても探してみようと思います。何か情報がありましたら、教えていただければ幸いです。

（たちかわ・ひとみ 都立高校教員）



(やり方)

- ① (事前の授業で) クラスごとに1回ごとのテーマ (肉、牛乳、野菜などの食材) を決める。
 - ② 実習1回ごとの予算を決める。(僕は1回1グループ約700円としました)
 - ③ グループごとに献立を立ててもらおう。
 - ④ 事前に、グループごとに買い物をしておいてもらう。
 - ⑤ 各グループごとに作ってもらい、お互い試食して、採点しあう。(僕は、採点用のプリントを用意しました)
 - ⑥ 最後に一人ひとりレシピや感想等をレポートにまとめて提出してもらおう。
- ※ フジTV系「料理の鉄人」(金) 23:00~23:45を参考にしました。

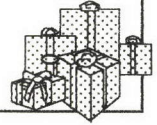
このコーナーでは、家庭科の授業や学活などでスグに誰もがマネできそうな皆さんからの〴〵掘り出し物〴〵(教材や教具、本、ビデオなど)をお待ちしています。使い方などを添えて、『楽市楽座』編集局：加藤昭仁までお便り下さい。(〒357埼玉県飯能市美杉台5-27-6, A-201 FAX 0429-71-0869)

(かとう・あきひと 私立中・高校家庭科教諭)



楽市楽座

加藤昭仁



<料理の鉄人の巻>

体調が悪くて、教室で授業するのにくたびれていた頃、少しは^{らく}楽しいなあって、ちょっぴり不純な動機もあって考え出したのが、『料理の鉄人』だった。(生徒の皆さんゴメンナサイ)

内容はTV「料理の鉄人」と同じように、毎回クラスごとにテーマとなる食材(魚とか牛乳とかなど)を決め、1グループ1回約700円の予算内で、90分以内で作って、お互い試食して評価しあうというもの。

グループごとに事前の買い物まで任せてしまったので、いろいろ心配もあったのだけれど、ネーミングの良さもあってか、中学3年の生徒たちは、この3回の授業を毎回ノリノリで楽しんでくれたのだった。

それが証拠に、いつもは始業のベルが鳴って10分くらいしないと、調理室に集まってこない生徒たちが、この時だけは、「カトーさん調理室開けて」なんて、休み時間からやって来て、後はドンドン自分たちだけで進めていっちゃうんだもの。(僕…存在感ほとんどナシ)

そして出来上がった料理も、チンジャオロースに、カキとエビのマカロニグラタン、いもケーキ、マッシュポテト、冷しワントン、いかめしにパニラプディングパフェetc…とこれがまたすごい。ぶきっちょな僕なぞ、とても作れそうにないものがいっぱい。それに味の方もGood。

毎回試食に来てくれた担任の英語の先生も、「あなたたちスゴイじゃない!」と絶賛。生徒たちも、お互い「おいしい。〇〇君ってすご〜い」なんて、ニコニコしながら評価しあっていたっけ。

う〜ん、やっぱり「なんでも自由」にやらせるんじゃなく、毎回のテーマや予算など、ワク(条件)があるから、却って「自由」になれるってこともあるのかもしれないな。それにしても、生徒は僕が思っていたより、ずっとずっと「自立」してたっけ。

かるゝい
家庭科相談室

「被服製作」の巻

O Kさんは家庭科の試験をやっている？

K やつているよ。だって、試験をやらないと点をつけられないから。でも、同僚は実技とか被服の提出物で点をつけているみたいで試験しない。僕がなぜ試験やるかというと、へたくそでも一所懸命やっているのに悪い点つけれないから。

U 私もそう。結局は最後の試験でつけることになる。本当は点数つけない

でいいというのが一番いいんだけど、一応つけないやならないから。

O そういえば年中評価するまなざしでみるのもいやだよな。

K こっちとしては一応見て評価しているふりをしているけど。

A テレビで見たけど、小学校低学年の先生がチェック項目を書いたパネルを持って手を挙げたかどうかでつけているの。この間の指導要領の改訂でそうなったみたいね。

K 友だちの提出物を写して出す子に對してはどうしている？

A 他人の作品を出したケースがあったのだけど、「評価不能」と書いて返す。何か言つて来たらどうして評価不能なのか話そうと思つたけど、言つて来ないから、きつとやましいところがあったのだと思うよ。

S 私はミシンに慣れさせようとして、要らない服を持ってきてもらつて

袋物作ることにしたの。すごく面白かった。三、四時間しかなかったけど、時間がないと思うと一所懸命やるのね。

A 私の授業では不要の衣類から、何でもいから身につけるものを作ることにしているから、えらく時間がかかる。四回のうち三回は決めかねて悩んでいるみたい。

U みんな布地持つてきました？

S 一着でいくつも作れるから布を分け合つていいと言つたの。何やつてもいいけど、とりあえず用途があるものを作つてねと。

F 私は中学だけど、調理実習用の作業着を作らせている。

O それは型紙あるの？

F 作っている子もいるし、体に合わせでじよきじよき切っている子もいる。

U 個性出したいのよね、生徒も。

Y いいなあ、みんな勝手なことを授業でできて。

A 私がなぜ生徒が自分で好きなものを作る授業にしたのかというと、教えるのがいやになっちゃったの。

K 生徒は作り方を聞きに来ない？

A 聞きに来たら個別に教えるけど、一斉に教えるのはいやになっちゃったの。一斉に教えるとなると、こちらもここまでやってほしいと言いたくなるし、進度がある程度とりまとめなきゃならない、それがいやで。

U 生徒の作ってきたのを見ながら同僚とわいわい言うのが楽しい。「何か分かるのよね、内面が」とか言って。クラスの雰囲気も作品に表れるし。それが出ないと面白くないよね。技術検定だとそういう面白さがないでしょ。
Y 私のところでは個性は出せないけど、だからって画一的ではない。みんなめっちゃくちゃだよ。だって、まつり

縫いできる子いないんだもの。

仕方がないから、帽子を手作りしているおじいさんの話が載っている新聞記事を見せたり、「自分らしい装い」と称して、「私ってこんなヘンなもの好きなのよ」と学校にいろいろ着ていってね、「先生、今日はまともな恰好しているじゃん」「明日はどんなの着てくるの」とか言われながら、「こういうふうに分が好きなもの作りたいときには技術がいるから、とりあえずこれはマスターしようよ」と動機づける。「先生だつてこれ、人に作ってもらっているのよ、技術がないとこんなはずかしいことになるからね」と言つて(笑)。

次回の家庭家の編集会議は七月五日(土)午後二時半から、フェミックスにて行います。ぜひいらしてください。「相談室」への相談もお寄せください。

◆家庭科のネットワーク&会報の紹介◆

「家庭科教員をめざす男の会NEWS」

号を重ねる度に充実し面白くなってきている「家庭科教員をめざす男の会NEWS」(「家庭科教員をめざす男の会」発行)。14号は住居特集号で、南野忠晴さんの「僕は人生で居場所を求めて奮闘している」という心憎いエッセイから始まり「住まい塾」の建築家高橋修一さんへのインタビューあり、仮設住宅の訪問記あり……建築の勉強を始めたいという編集長の南野容子さんの面目躍如の号です。

男性家庭科教員を増やそうという会の趣旨に賛同される方なら性別年齢を問わずどなたでも入会できます。

- ◆事務局・編集部(南野容子・南野忠晴) 〒532 大阪市淀川区塚本4-16-48
- ◆会費 年間1000円(年3回会報発行) ◆郵便振替 00910-6-101626

共学家庭科

論争

第三回

家庭科の独自性を どう捉えるのか？

四月号の小平さんの
問題提起に応えて

青山 禎子

私も家庭科を「生き方を考える」教科だと思っています。

三十年も前から家庭科の男女共修運動に参加し、高校家庭科の男女共修元年にかかわりたくて、非常勤講師になって四年目になりました。激しく燃えて？横断幕（あの時のブルーの横断幕は私の自前の作品でした。写真を持っていく方もいらつしやるのではないでしょうか）を持って文部省前に押し掛けた者としては、

高校生がどんな姿で授業に参加するのか興味津々でした。あんなに力んだ男女共修の家庭科の教室に、彼らは涼しい顔で座っていて、改めて、三十年の時間の経過を痛感させられました。

私は、当初、中学校に勤務していましたので、三十年来、初めて向き合う生徒には、必ず「家庭科とは何か」「何を学ぶところか」と問いかけてきました。中学生になったばかりの彼女らは、何の疑問もなく、「家庭科」とは料理裁縫を学ぶことであり、母親のするようなことを、白衣を着た先生が教えている程度に考えていました。将来、お嫁に行った時に困らないように料理裁縫を学ぶという考えは、どこで身につけてくるのか、ほとんどの生徒がそう考えていました。母親たちからも、家庭生活の実践者としての、他教科ではみられないような、教え方に対する批判があったり、学校のなかでも女なら誰でも家庭科は教えられると思わ

れていました。

高校で男女共修の家庭科の時代になつたいま、さすがにお嫁に行つた時に困らないようにと言う生徒は少なくなりまして、それでも家庭科は男子生徒にとつては、将来一人暮らしになった時に困らないための、単身赴任や妻が病気をした時に備えての家庭科になって、本来自分の仕事であるはずの家事も妻への「協力」としてしか捉えられていない傾向に危惧を感じています。これだと生活的自立は「一人暮らしで困らないためのもの」ということになりかねません。「自立とは何か」はもちろんのことですが、それ以上に「なぜ自立が必要なのか」を考えなければならぬのではないのでしょうか。

また、「家族とは何か」の問いに対しても、これだけ家族や家庭の在り方の多様化が言われているのに、「父母がいて子がいる」自分の家庭が普通で、それ以外の形態は特別で事情のある人なのでは

ないかと考えているようにも思えます。

最も個人的と思っている家庭生活が、いかに、社会から影響を受け、その動きに左右されるものであるかに気がつくのに時間がかかりますし、「教育」ということについても、「学校教育に政治を持ち込んでほならない」と言われていることに疑問がないらしく、学校の教育が文部省で決められていることは知っています、その文部省が政府の中にあつて、教育が実は政治そのものであることを納得するのは難しいようです。

「生活」とはいうまでもなく、着たり、食べたり、住むことですが、人は生きるために食べるのですから、まずはじめに、いかに生きるかという柱がなければならぬわけで、いかに生きるかということや人とのかわり方を考えない——哲学のない生活など有り得ないはずです。

つまり男女共修の家庭科とは、生活が社会的であり政治的であり哲学的である

ということを基盤にした学問であり、そのことを踏まえた上に成り立つ生活的技術の学習ではないでしょうか。

そして、そうであるならば、富国強兵時代につくられた「家事科」がめざした、料理・裁縫を仕込んで家計の支出を節約でき、他方では貧しさや政策に疑いをさしはさむことのできないような良妻賢母を育成する教育と、男女共修の家庭科とは根本的に違うという出発点を明らかにすることが大切だと思えます。

すでに中学校でも共修が始まっていますが、教師のメンバーが変わったわけではなく、男女別学の技術・家庭科の教師がそのまま共修の授業を受け持っています。共修のための準備研究は行なわれたと思えますが、そこでどういう取り組みがなされたかは分かりません。私が出席した高校の家庭科研究部会では、共修になつて二年目の年でしたが、共修についての話題は出ませんでした。このことか

ら考えると、中学校で共修の家庭科を学んできたはずの彼らですが、高校の共修家庭科を学ぶにあつて、それをどう捉えているかは、重要な問題だと思えます。

そこで、前記の「家庭科って、何?」とか「なぜ、男女共修?」を念入りに繰り返し、高齢者問題や衣生活のときにも社会的な視点を必ず入れるようにしているのですが、社会科の授業みただと生徒に言われ、そのたびにまた振出しに戻つて共修家庭科の意義を説明し、これまでの家事科のイメージを取り壊し、新しい共修家庭科をつくり上げるのに躍起になつているところです。

生徒たちも、すんなりと受け入れられるわけではありません。調理実習が中心の二年生になつての家庭科の授業で、「まっ、いいか。一年の時の、あれも家庭科だ!」と言つていたとか……。

(あおやま、ていこ 神奈川県立高校非常勤講師)

「先生うちらの授業苦痛でしょ」。S
がボソツと私に言いました。

工業科のやんちゃなあるクラスで、
授業が始まってしばらくたつのうろ
うろ立ち歩く、マンガを読む、イヤホ
ンで音楽は聞く、おまけに卵形ゲーム
がいくつもビービー鳴る……そんな状
況の時でした。

その日彼らは、特に落ちつきがなく、
モグラ叩きのような指導を繰り返し、
なかなか授業にならず、こっちもイラ
イラしていました。そんな様子を冷や
かにSは見ていました。

「苦痛じゃないけど、なんでお前ら
こんな落ちつかんのよ」と言い返しま
したが、本当はとても苦痛でした。私
の本心、それも見られたくない自分を
簡単に見抜かれたことはずかしく申
し訳なく思いました。

翌週、同じクラスで、始まってしば

らくしてようやく授業らしくなった静
かな教室で、やんちゃなKがノートを
書きながら突然言いました。

潮風の荒く

江口凡太郎



「先生うちらのクラス嫌いでしょ？」
「うちらだけでしょ、こんなうるさ
いクラス」

「でも、2こ上よりましでしょ？
あれはしゃれにやらんよ。あいつら本
当にノートとか書いてた？」

Kも気分次第で授業に参加したりか
き回したりするひとりですが、この時
は素直な気持ちを感じたままに言葉に
したのだと思います。

さすがに、これには参りました。彼
らのするどい感性には脱帽します。

「お前らを嫌いとは思ってないけど、
いいかげん落ちついてくれよ。でも、
先週もSに言われたけど、俺が嫌々、
授業してるようにみえることは申し訳
なく思うよ」。

こちらも正直なところを話しまし
た。しばらく、こんな会話がつつさま
したが、すぐまたノートを書く音だけ
になりました。先週の騒ぎがうそのよ
うです。
(えぐち・ほんたろう)

■連載

おんなが

歳をとるといふこと

木村栄



年を取ると体のあちこちにガタがくる。肉体の変化は一目瞭然だが、心の老化は見えにくい。身体と同様、水気が減って干涸びたり、硬化したり弱ったりするのだろうか。

一年程前、ある友人が「初老性うつかも知れない。やたら怒りっぽくなつてすぐ喧嘩になつちやう。だから、なるべく

人に会わずに、一人で草むしりなんかしてるの」などと言っていた。

常々、怒りがエネルギー源だと公言していた元氣な人である。

漢方を聞きかじつた別の友人によれば、肝系・胆系・心系・腎系などの体質に応じた情緒の特徴があると言う。喜・

怒・哀・楽・怯の五つで、何がどれか忘れたが、腎系が怯だということだけは覚えている。私の問診表をみて「典型的な腎系ね。水はけが悪くて水太り、疲れやすくして脆弱、眠りも悪い。いいことないわ」と散々けなした上に、「情緒のタイプは怯え」と追い討ちをかけたからだ。一々当たっていた。喜びも怒りも悲し

みも人並みにあるが、一番強い感情は怯えだった。小心の上に取り越し苦労、些細なトラブルの度に最悪の事態を想像して我が身を苛む。怖いもの知らずの若さの陰に隠れていたそれが、年経るに従って顕在化してきていた。

自分でも病的だと思つた時期もある。落ち込んだ時は友人に電話をかけまくつて発散していたのが、そこから又落ち込みの種を捨てるのが怖くてそれでもできない。些細な言葉の、壁に写つた特大の影に怯えては、頭を抱えてしまふという風だった。

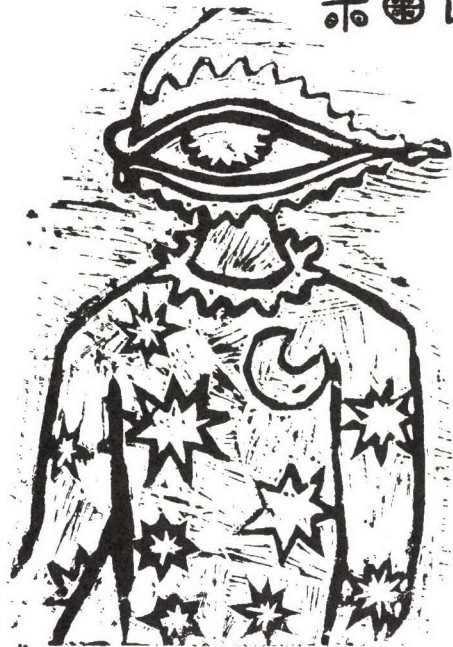
友人は「怒」、私は「怯」。年齢の変化の節目に、人それぞれの情緒の特徴が強く出て抑制がきかなくなり、そのことが気持ち落ち込ませる。初老期うつと言えれば納得がいく。そう納得したら、落ち込みから抜けだす手掛かりがつかめたような気がしてきた。

人間、時には自分の心のありようを外側から眺めて相対化してみることが必要だ。それができるのが年の功というもの。心の老化は心の成熟と補い合うことが可能なのかも知れない。

(きむら・さかえ フリーライター)

〇き 〇き 〇んぼ

桑田良彦



「田植え」が終わってヤレヤレである。一服して『ごっつお』（ごちそうのこと。昔の田植えは、重労働で終わったあとは「泥落とし」「さなぶり」といって、ゆっくり休んで、すき焼きや造りを食べて酒を飲んだらしい）を食っていい気分である。今年の我が家のメニューは、造りとすき焼きと筍ご飯であった。筍ご飯は、神さんに供えて……。昔と一緒にである。

さて、いよいよ待ちに待った「魚とり」の季節がやってきた。川べりで魚の姿を発見すると、心が踊ってくる。ワクワクドキドキウキウキランランである。

川のおいにする 川のおいにする

早くおいでよと 川が呼んでいる

おひさまギラギラ おひさまギラギラ

地面をこがすよ おひさまギラギラ

草の道ポーポー草の道ポーポー

緑に燃えている 草の道ポーポー

しまへびシマシマ しまへびシマシマ

カエルを飲み込んでいるよ

しまへびシマシマ

と思わず自作の歌を口ずさんでいる。

子どもの時のことだ。『一期一会』とは、このことだったと思う。

隣の村に友達がいて五人で魚とりに行った。

手に手に「もんどり（つけびんともいう。煎った糠・さなぎ粉・小麦粉・みそ・酒の粕などを団子にして入れる瓶のようなもの、ただしお尻に何か所穴が開いている）」「巻き網」「ヤス」「ブリキのバケツ」「水中めがね」を持っている。

しかし、なんといつても狂喜するのは、「にぎり」である。石の底の隙間に手をつき込んで魚を握る。その日は、一人が大きな『がま』（魚のすみか——石と石の隙間や川岸の木の根の間などの魚が隠れているところ）をみつけた。あまりに大きな石なのでそれぞれの隙間から五人が手をつき込み始めた。するとすぐに、又ルヌルとした感触、暴れ回る感触がからだに伝わる。ビビッとくえいわれぬなにかが、大脳に届く。「ウジャウジャおるわ」「ごっつい！」「こっちもや」「あかん！手がとどけへん」。次々と握りまくって、それまでつかい奴が続々と姿を見せた。

『アカモト』『天然色』『イシクイ』『フナ』『ガンド』。もちろん、みんな例のごとく奇声を発している。「ウォー！アヒョー！もうあかん！」。ブリキのバケツ五杯がまっ黒になった。それぞれ握った奴を『しのべ』（笹のような竹）の枝に魚のえらをとおして見せあう。五人で一杯ずつ分けて、自転車の荷台にバケツをくくりつけて家を持って帰ると母親が天ぶらにしてくれた。

この時一緒に魚取りをした友達が、能勢で小学校の先生をやっている、時々僕らの「田舎バンド」を学校によんでくれる。その時、この「魚とり」の思い出話をする。彼は、「ほんまによう魚とったなあ……けど悪いこともしたな。ク2Bクヤク水爆ク（5cmくらいの棒状の爆弾？マッチの箱で点火出来た。あまりに威力が強すぎるので発売後短期間で販売中止になった）をク天然色ク（オイカワ）の口に入れて泳がしてみた。らこっぽみじんになった」「せやけど、あれから虫や魚を殺さんようになった」。僕は「子どもの時、魚釣りにあきたら、釣った魚をまた針につけて疲れるまで泳がして、そのあと水面にたたきつけて何匹も殺したことがある」「せやけど、二人ともたくさん川魚を食べたやんか、それで元気になって……。おれらは、魚でもあるんや……！」

（くわた・よしひこ 豊能図書館館長／題字・版画とも著者）

変な子じゃないよね

文-滝野澤直子

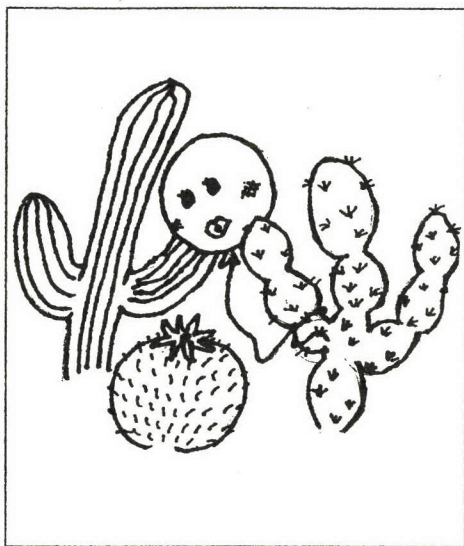


イラスト 滝野澤直子

大学に入ると、ほしかったものが次々に手に入った。親元を離れてのきままな生活。学生寮では女の子たちがばかり朝でも夜でも賑やかで元気で、同室の先輩も優しく、そしてなにより、私にも友だちができたんだ。それも7人も！ご飯をいっしょに食べたり、自転車を並べて買い物に行ったり、夜中に合鍵で寮を出てラーメンを食べに行ったり。いつも冷めていて、寂しかった自分はこのにはない。明るく変わった自分がうれしかった。

お休みの日に家に帰っていたら、「電話よ」と母。「なんだかよくわからない所からだよ」と言われて受話器を受け取ると、妙に陽気でなれなれしい男の声で「おめでとうございます。あなたは選ばれました！」……なんのことやら、すっかり男のペースにのせられて、気がつくとも翌日の待ち合わせの約束をしてしまった。なんでもすごくいい商品があって、将来性のある私（！）には打ってつけだから、ぜひ説明したいのとこのだった。

「やめたら？」。怪訝な顔の母に、「だって選ばれたんだよ」とブローも化粧もバッチリ決めていそいそ出かけた。電話の男は会ってみるとそれほど愛想がなく、通された事務所で少し待たされて、説明が始まった。航空機運賃が割引になったり、キャブテンシステムが無料になるなど特典いっぱいのカードなのだそうだが、学生の私にはあまり関係ない。おまけに値段が、五十万

円。そんなお金は持っていないと断ると、英会話のビデオが全何十巻ついてくるとか、ローンなら払えるとか、かなりしつこい。そのうち「将来について真面目に考えていないのか」「ローンが苦しくても励まし合って払っている仲間がたくさんいるから友だちが増える」と、説教じみてきた。麥なのに捕まっちゃったなあ。見回すと向こうの席にはご近所の女の子も来てるじゃない。なによ、選んだなんて、嘘つき!

かなりインチキだとわかったのに、くどくて退屈な話を何時間も聞かされて、あげくに「やる気がないのか」と叱られて、ついつい契約書にサインをしてしまった。幸い印鑑を持っていかなかったので、その日書類はできあがらず、翌日またということになった。家に帰って親に話したらこっぴどく叱られて、結局翌日お断りしたのだが。

しかし敵も簡単にはあきらめない。お休みが終わって寮に帰ると、今度は寮の近くまでくると言う。しぶしぶ会うと、もう一度考え直せときた。

「友だちができますよ。仲間がいるついでいいですよ」。詐欺師のくせにエラそうに。

「いいんです。私、友だちいらななんです。一人がいいんです」

「誰かにわかってほしいと思わないんですか」

「ええ。わかってほしいとも、わかりたいとも思いませんね」。男の顔が少し当惑して、ふいに疲れたような表情になった。私はハッとした。

「それじゃ、寂しいですよ」

「寂しいですね」

わかってほしいとも、わかりたいとも思わない。断る口実のつもりだった言葉に、私は自分で傷ついてしまった。あきらめて帰っていく男の背中を見ながら、七人の友だちがいても、やつぱり独りぼっちなのかもしれないと思った。

(たきのさわ・なおこ)

このままではいけない？

吉原令子



人種差別

私はアメリカに来てはじめて、自分がマイノリティであることに気づいた。日本人として日本で生まれ育つというごく当り前のことが「当り前」ではないのだということを知った。マジヨリティの集団の中にとっぷりと漬かって生きてきた私には、まったく気づかない問題だった。スーパーに買い物に行くと、大人も子供も私をまるで宇宙人のごとく奇異な目で見る。レジの店員も私が英語ができるのかできないのかわからないために、私とは目をあわせようとはしない。他の客とはフレンドリーに今日の天気はどうだとか、買ったものをどう使うのかだとか、和氣藹々と話しをしているというのに。これが、私が夢見ていたアメリカだったのか。

私がそれまで知っていたアメリカとは、「メルティング・ポット (Melting Pot)」と「オーブンでフレンドリーなアメリカ人」、そして、映画に出てくるトム・クルーズのように「かっこいい人」だけだった。しかし、留学先の小さな町は、人口2万人、そのうち大学に通う学生が八千人を占める学生町である。住

民も学生もそのほとんどが白人で、二〇%にも満たないアフリカ系アメリカ人は大きな町や他の州からやってきた学生たちで、アジア人はそのほとんどが留学生であった。夏休みや冬休みになればほとんどの学生が帰省してしまうので、この小さな町は白人一色の町となる。

その町で、私はアメリカがかかえる人種差別問題の根の深さを身をもって体験することになった。道を歩いていけば、背後から車が近づいてくる気配を感じ、振り返ると「国へ帰れ(Go home, bitch)」と一度も会ったことのない人から言われ、大学構内を歩いていけば、「米食いあばずれ(a rice bitch)」とこれまた、まったく面識のない人から罵倒される。パーティに招待されていけば、招待客のひとりから「日本人はお金のことばかり気にしている。経済的には発展したかもしれないが、文化的には劣っている。そこに日本人の女の子がいるが、なにか意見はあるかね？」などと名指しされたこともある。このような出来事は私の「このままではいけない症候群」にますます拍車をかけるきっかけとなった。

人種差別を受けないようにするためにはどうしたらいいのだろうか。私はマイノリティとして自分のアイデンティティを保つために闘うことよりも、マジョリティに仲間入りすることを選んだ。目立つ存在になることよりも、カメレオンのように色を変え、白人アメリカ社会に適合しようとした。つまり、ありのままの自分を受け入れることができなかったのだ。留学してから約一年間、私は自分の「日本人らしい英語」も、「日本人らしい行動」も、日本人らしいものはすべて否定した。そして、黒い髪の毛も、黒い眼も、黄色い肌も大嫌いになってしまった。私はいつもルームメイトの白人のアメリカ人女性を観察し、どんな言葉を好んで用いるのか、どんな振る舞いをするのかを見ては真似した。白人のアメリカ人女性のようになろうと必死だった。それから一年後、「あなたのしゃべり方はブレンダにそっくりだわ」と言われるようになった。

ぱり分からず夫の変化に戸惑うばかりで、その理由を夫に聞くことができなかつた。セックスのことを口に出すなんて恥ずかしいと思つていたからだ。でも、心の中はそのことで頭がいっぱいだった。

今思い返してみても、その頃が一番つらかつたような気がする。

セックスイコール夫の愛情のパロメーターと思つていたから。夫の愛を実感できない私は毎日もんもんとしていた。それ以外は子煩悩で、家事も率先してやってくれる夫だった。それだけでもいいじゃないかと自分を慰めたけど、私が欲していたのは、男と女、お互いがお互いを必要とすることだったのだ。

唯一考えられる理由は、夫の私への気持ちの変化だった。

子どもができてから夫は私をママと呼ぶようになっていた。「私は子どものママだけど、あなたのママじゃないのよ」。何度言つても夫は呼び方を変えなかつた。私の切羽詰まつた気持ちを夫は理解していなかったと思ふ。夫自身商家に育ち、母親への満たされない思いを、私を母親代わりにすることで満たそうとしていた。夫自身は自分の中にあるものにまるで気付いていなかった。ある日意を決して夫にそのことを伝えたけれど、夫は決して認めようとはしなかつた。そればかりか夫は私が悩んでいることに対して、悩んでいる私がおかしいと言つたのだつた。その時点で私は完全に切れてしまつた。

たまたま事がセックスだけだつただけで、生き方に対する考え方から、事が起きたときの対処の仕方まで、なにもかもが違つていた。恋に目がくらんでいた私にはその違いが分かつていなかった。ただそれだけだつた。夫への思いは怒りを通り越して憎しみすら抱くときもあつた。自分の不幸の原因は夫だと思つていた。

私は仕事に逃げた。女としての満たされない思いを仕事をするることによって満たそうとしたのだ。下の子が二カ月になつたころから仕事を再開し、来る仕事はすべて引き受けた。年子を抱え、目の回るような忙しさだつたけれど、すぐ評価と結果がでる仕事をしている方が、夫と向き合ふより楽だつたからだ。当然夫とはすれ違いの生活になり、二人の間の不協和音は大きくなり、子どもに弊害も出て来た。でも、私には周りを気づかう余裕がなかつた。(次回につづく)

樹の森の日記



ツル
樹

森
樹

身辺あまりに慌ただしいことが何ヵ月も続いたので、少々のことではへこたれなくなつたけれど、気温三〇度の沖縄から小雨七度の札幌へ移動したら、さすがに身体にこたえました。

講演が終わつた後、まっすぐホテルに帰るの気が乗らず、誰かと話したくなつてふと思ひ出したのが、以前名古屋でのシンポジウムで名刺交換した「女のスペース・おん」。電話してみたら喜んで迎え入れてくれました。講演の出来がいまひとつだったなあと自己嫌悪に陥っていたので、喜ばれるっていうのは、何かそれだけでうれしい感じ。心にバツと光が射す。

知らなかったのだけれど、「おん」はちょうど第一回加藤シズエ賞を受賞した直後。暴力を受けた女性のシエルター（緊急保護施設）の新たな運営で忙しい。経費に半端じゃないお金がかかると聞いたけど、ほんとにそうだろうなあ。この時も電話がひっきりなしで緊迫した局面も。野戦病院みたいだな

と思つた。

リブの時代を通過した個性の強い彼女たちは頼もしい。対してわたしは情けない。こんな弱虫いなんじゃないかと思うほどだ。感情を揺さぶられると、とたんに参つてしまう。

「スタツフのみんなはどうやって気を抜くんだろう？」。とても気になつたので、できることと言えばせいぜい笑顔を振り撒くぐらいなわたしだ、ニコニコ光線を辺り一面に撒き散らす。すると夕ご飯もごちそうになつてしまったのだった（なんて甘え上手！）。

それにしても、迎え入れてくれる場所があるというのは、いいなあと思う。落ち込んでいる時は足を運ぶのすら苦痛で身動き取れない感じがするけれど、でもエイッ！と体を動かさばきつといいことが待っている。これに関しては一度も裏切られたことがない。閉塞状況から身をずらすには、一歩外へ動く勇氣、そして憎めないカワユサだけが（コラコラッ！）、必要なのだった。



居場所考 ②⑧

夫婦の居場所……

水田宗子

NHKの衛星テレビで、羽仁進さんの「アフリカ大草原三十年の記録」を見た。どれもが素晴らしかったが、とりわけ豹の母と子の関係に感動した。羽仁さんのいう「動物は偉い」ということがわかって、三十年もアフリカの動物を尊敬しながら撮り続けている羽仁さんに、心から尊敬の念を増した。

豹は群れを作らず、母豹はオス豹から離れて子育てを単独でする。たいていは一頭か二頭の子を産むが、オスは家族に加わらないので、一緒に行動する豹の数は少なく、〈単独者〉のイメージが強い。今回の映像も、一頭の子豹を連れた母豹を追ってのものであった。豹は比較的脚步が遅く、狩があまり上手ではないそうで、それに群れではないので、チーターやライオンのように子連れで狩をするのではなく、子供を残しておいて獲物を追いに行く。つまり、子連れ豹でも、幾日もかかる狩をしている間は、単独行動をとる時間が長いわけだ。

獲物を持って帰り、子豹と共に食べている姿には胸を打たれたが、それにしても父親の姿はどこにもない。オス豹はまったく現れないのである。母豹は、なかなかすて



Ja.

きな子別れをしてからは、草原を単独で生きて、またどこかでオスと出会い、また子を産み、育て、その子と別れていく。

ライオンやチータのように、群れを作る肉食動物は、猛獣であっても体を寄せ合い、互いをなめ合って、助け合って生きている。その姿が、人間の家族と近くて、哺乳動物としての親近感がわく。しかし、単独行動の豹の姿には、どこか社会になじまず、他者と狎れ合うのが嫌いで、一人で生活するのが好きなタイプの人間の姿を彷彿させ、物語の中の人間のドラマを見ているような気になってしまった。

人間は、家族と一緒に住み、群れの集合による社会をつくって生きる動物だからこそ、群れから出て一人で生活する夢を見続けてきたのだろうか。しかし、最近では、人間の単独生活、〈単家族〉が、ポスト産業社会の必然的なあり方だという見方がある。私は最近、『建築ジャーナル』という雑誌で、匠雅音さんの『核家族から単家族へ』という本の書評をしたのだが、核家族は工業社会の家族形態として合理的であったが、情報社会へ移行しつつある現在では、生産を支配するのは頭脳労働となり、その再生産は核家族という家族のあり方が必要としなくなったのだという。頭脳労働に性別は関係ないから、役割分担や分業は性別と無関係になる。現に経済力を夫に頼り、社会との関係も夫を通して間接的だった専業主婦は少数派となりつつあるし、テクノロジーの発展で、女も男も対関係や家族を作らなくても子供を産み・育てることができる。対関係も生殖も子育ても個人単位で、個人の意思と志向によって、それぞれのやり方で随時作るものになるだろうというのが、著者の論旨だった。人間も、ライオン型から豹型へ移行しているのかもしれない。

同じころ、林道義氏の『父性の復権』を読んでいる、社会や家族を人間にとって不



Ta.

変で必要不可欠なもの信じ込んで、そのあるべき姿、なかでも父性や母性を本質的なものという前提に立って、父性の復権を大まじめで論じる著者の姿が、どうもサル山の雄サルのように思っていた時だったので、私は匠氏の本をいくらか観念的とは思いますが、新鮮な印象を受けたのだった。

父性や母性を他者から教育され、伝授され、その規範を演じ続けなければならぬ家族は疲れるだろうが、さりとて「単家族」での夫婦関係なら、豹並みの単独行動でということでもありえないだろう。最近の建築業界では、夫婦は別室が快適ということで、はじめから夫婦別室を設計し、それを売り物にしている傾向もあるらしい。

家庭内別居やセックスレス夫婦の現象は、父性や母性の欠如論や復権論に内面を縛られている家族の、ひとつの破綻現象のように思え、対関係がセックスレスで、夫婦はいつも単独行動で、それでどうして家族という形態を維持していなければならぬのかと思うが、どういう生活様式があってもよいといえば、それでいいのかもしれない。そう考えると、夫婦別室などは簡単なことだ。別室が簡単なのに、別姓はいけないというのは矛盾するが、別室のほうが簡単だからこそ、せめて名前だけは同じにしておけ、ということなのか。

私自身は、人間は生きる時間が限られているから、なるだけいつも好きな人とは一緒にいたいというライオン型だが、羽仁進のそのテレビで、野生動物は自分にとっての最適な生き方をみつけた、すでに完成された生き物だが、人間はまだそれを見つけていない不完全な動物だ、というコメントがあつて、大いに同感した。人間もサルからもっと「進化」して、あんまり身内同士戦わないようにしたいものだ。

(みづた・のりこ)

「母性の二面性をめぐって」を読んで

東京 安藤 由紀
(グループCAP)

5月号の河村ふみさんの記事を読み、シンポジウムでの記憶が甦り、私側から見てきたいきさつと、思いを是非伝えたくくなりました。そこに書かれていた記事があまりにも一方的で、これをそのまま読んだ人に鵜呑みにされなくなかったからです。

シンポジウム当日はもちろん、その二日後に届いた稲邑さんの手紙は「身体状態が出るほど嫌悪を催すテープだったのに、何故わからないのか」「嫌なら最初に断ってくれば良かったのに」という内容で、しばらくの間私は抗鬱剤と睡眠剤を飲み続けました。そしてやりきれない思いに、その時はもう性的虐待の運動を辞めようと思えました。

1 「記事の扱い」

河村さんの記事は、活字になる前に読ませてほしかったと思います。CAPについての記載もさることながら、個人の実名やスポーツクラブ事件の内容など、本人に知らされない場所でも一方的な感想で述べられていることに、私としても驚きました。

スポーツクラブ事件がこうしてWe読者の目にふれ公になってしまい、相手企業から何らかの行動があった時、河村さんはどう責任をとられるのでしょうか。あの日の会場で、匿名で企業に働きかけていると説明したのに、私は今大変不安を感じています。

2 「シンポジウムの経過」

シンポジウムの企画は、去年の十一月にたてられ、最初のミーティングでは様々な人達がスタッフとしてアイデアを出していました。けれどシンポジウム当日までの約四ヶ月間何の経過報告もなく、荻森さんがコーディネータという設

定だけが変わっていなかったのです。私はその間荻森さんにスポーツクラブ事件を説明し、シンポジウム当日は被害にあった子どもの保護者の声をテープで流すという了解をとっていました。

その時点で、私の意図をどれくらい理解してもらっていたのでしょうか。フェミックス側から反論なり、抗議がなかったのは何故なのでしょう。テープはあくまでも問題提起として使い、「利用された」というさせられ感は持たなくて済んだ筈です。

3 「主催者側の責任」

性暴力に関して講演をうつ場合には、当日起こりうる事への事前の検討と、その対策が必要です。またパネラーの主張を守るために主催者側からの応援も必要です。あの日起きた出来事は、これら配慮のなさど詰めのかさから起きた結果だと、私は思います。河村さんの記事を読んで、参加した一人の感想ではあつて

も、主催者側としての責任ある見解とはどうしても思えませんでした。

はがき作戦をよびかけた事にそれほど怒りを感じ、オロオロととり乱すくらいなら、どうしてもっと事前に私に近寄り、意図を計る行動をなされなかったのでしょうか。

4 「性暴力」にまつわる感情

性の纏わる被害を言うとき、母娘関係だけに終わらず、そこには父娘問題、男性の辛さ、子ども時代に受けた恐怖や不信などの様々な問題も内包されています。あの日の会場で「皆の前に出て足がガタガタする。男の子への被害もある事がわかっただけでも、来て良かった」という男性からの意見もあつたのです。また、被害を受けた保護者の声のテープを流している時には、その内容に共感してくれた人も多数いました。

「男も女も共に性暴力を語るう」という設定は、少年にも性的虐待がある事実に基づいてほしくて、最適な場所だと思つたからこそ提言したのです。

また、母性に関する発言のみに終始していましたが、「子どもを守るのは母親の役目だ」という発言は、テープの中からも私の発言にもありません。母親だから守っているのではなく、問題の大きさに気づいている人間が行動しているのです。

また保護者のためのカウンセリングはスーバーヴァイザーと二人で検討した上で、はがき作戦をしようという結果になつたのです。どこかでこの事件の支持を得る必要があります。私たちが必要としたのは当事者の為のエンパワメントであつて、非難や攻撃を受けることではありません。

5 「投影の問題」

最初に「そんなテープは聞きたくない」と発言した人と、その後話し合う機会をもちましたが、安藤個人の姿に自分の母親を投影したのだという説明を聞きました。でも、投影は単なる投影にすぎません。

性的虐待を訴えたいという単純な意図

個人の抱える問題にすりかわり、私の発言する一言一句にまで抗議の声があがり、中には「真面目なのね」という不快なからかいや笑いを浴びせる人もあり、あの日は本当に途方にくれてしまいました。

当日の夜「安藤さんの扱われ方には疑問を感じた」と小西さんから電話をもらいました。その後読んだシンポジウムのアンケートには「小西さんだけが吐かなかった」という感想もあり、憤りや挑発の感情が、2人のパネラーに攻撃する形で盛り上がり、本来のテーマに戻す働きかけが誰にも出来ないままに終わってしまったのです。

その後、当日発言をした人から「あの時は無責任な発言をして反省している」「安藤さんが気の毒だった」というメッセージがいくつか届いて、救われる思いでした。

6 「事後反省」

シンポジウムの後、私は私のカウンセラーと相談し「テープを流した時に、講

演後興味のある人は集まって下さい」とつけ加えればよかったね、と話し合いました。その後稲邑さんからは謝罪の言葉と、「自分の怠慢だった」という手紙をもらいましたが、河村さんの記事はそれらについてはまったく触れられていませんし、責任はなかったという記述さえあります。はぐらかされた思いと釈然としない不信感私の中にまだ残っています。

※ ※ ※

東京 杉野 光代

松倉 ゆり

(グループCAP事務局)

We誌五月号に掲載された河村さんの文章のCAPに対する幾つかの誤解について、六月号で訂正して頂きCAPが大切にしている「本来子ども達自身が持っている力を勇気づけ自己決定権を認め合う」という思想については、理解していただけたと思います。

スポーツクラブ事件に関しては、グループCAPの活動を離れて安藤が問題意識を持ち、取り組んでいる事です。けれども、同じ虐待防止活動に関わる者として、現に性的虐待が発覚し、二度と同じ事が繰り返されない為にも事実を知った者が社会に伝え、社会全体がその事実を受けとめ、虐待を防止していくことを私たちは大切だと考えています。性という敏感なテーマと同じく社会でタブー視される虐待を語る空間では、語る人も聞く人も自分の中でうごめく何物かが刺激されます。一つの言葉がそこでは白・赤と各々の経験の中で色づけされます。安全な空間をその場に在る人全てで創る、一人一人がそこに存在する責任を確認する必要があると感じています。三月のシンポジウムでスポーツクラブの事件が提議されたことについて企画者間で認識のずれがあり、一参加者としてその場にいる私たちはとても動揺し、また不信感が残りました。

※ ※ ※

稲邑 恭子
(フェミックス)

安藤さんの文中にある発言者のその後の安藤さんとのやりとりについては、こちらで当人から聞いているものと、安藤さんのお感じになっているものとの間にはかなりズレがありますが、それを言い出すとキリがありませんので、ここでは、安藤さんの文中にある、私が翌日に出した手紙のほぼ全文(二回目に出した手紙はこの手紙にひどく傷ついたとおっしゃるので書き方を変えて出しましたが、基本的に私の考えかたは変わっていません)を文末に掲載することにどめたいと思います。

コーディネイト役を薦森さんに一任したことは無責任といわれればそれまでですが、テープを流すことは、当日打ち合わせに三十分遅れてこられた安藤さんから聞いたのが初めてであって、早めに会場に戻る予定でいた私は一〇

分足らずしか同席できず、その内容まで聞く時間はなかったので、その後の展開は正直言って予想もできませんでした。

今回の企画は性暴力を糾弾するため
の会でも、自分が受けた性暴力の被害
を語り合う会でもなく（もしそうであ
れば当然設定の仕方も配慮のされ方も
違っていたと思います）、糾弾されると
思っただけという集会には出ないであ
る男たちにも参加してもらおうのが主眼
で、企画段階で参加していただいた安
藤さんにはそのことを了解いただいた
いると私は思っていました。多分そこ
に行き違いがあつたのだと思います。

安藤さんは「バネラーの主張を守るた
めに主催者側からの応援も必要」と書
かれています。私は集会を企画する
とき、細かい筋書きは作りません。趣
旨さえ確認しさえすれば、後はバネラーの
かたにゆだね、ご自分で自由に表現し
ていただく、でももしそこでご自分が
引き起こした反応があればご自分で引

き受けていたのだかと思つています。
悪意ある妨害や中傷でない限り、原則
として会場からの発言は抑えたくない
のです。ただ会場の空気が一色になる
のは好きではないので、グループC A
Pの松倉さんが私のそばに来て「テー
プを聞いて泣くのがいけないかのよう
な雰囲気になっている」と言つてこ
れたことに対して、彼女がそのように
感じてしまうのももっともだと思ひ、
そのことをきちんと言言するように彼
女にも司会の葛森さんにも頼んだので
す。

（以下に「安藤さんへの手紙」を掲載）
昨日はお世話になりました。当日気
になりながらも電話をかけるのがため
らわれ（疲れていらつしやるだろうと
遠慮したこと、安易な慰めやお詫び
はしないほうがいいと思つた事と半々
でした）。朝、葛森さんから安藤さんが
書かれたFAXを読ませていただきま
した。

昨日、安藤さんが話し始めたとき、
私の中に違和感が広がっていきまし
た。講演慣れしすぎた講師のような話
し方。上手すぎて、ああ信用されてい
ないんだなと受け手が一段低く見ら
れたように感じました。その後でテー
プを延々と聞かされいつのまにか「運
動」のための場にすりかわっていたの
です。それから、あのタイトルに惹か
れた人のなかに違和感や怒りが広が
ってきたのは言つて見れば当然のこと
で、後半堰を切つたようにテープへの
違和感を表明する人が出てきたのは無
理もないこと。私にはそれをとどめる
ことがフェアとは思いませんでした。

小西さんとは違つて安藤さんは企画
段階から関わつてくださり運動の場
ではなくて感じたことを語り合う場
にしたいということは了解してくださ
っていたはず。それがどうしてああい
うふうになつてしまつたのでしょうか。

それにあのテープの内容は母親に支
配されたことへのルサンチマンを抱え

る「娘」の立場から聞くと身体症状が出るほどに嫌悪を催す内容でした（母親からのこの子は取り返しのつかない過去を背負っているという不安のまなざしを浴びながら育つ子どもはたまったものではないと思います）。お母さんたちのあのテープに耐えられなくなつて私の所にどうにかやめさせてくれと言つて来る人が何人もいて、彼女たちにとっては安藤さんのなさったことは暴力に等しい行為で、そのことに対して

いやだと訴えたのです。そのことにどうして安藤さんが気づかれないのか、私にはとても不思議でした。あのときの対立は安藤さんが感じられたような被害者と加害者の構図ではなく、言つて見れば「サバイバー」同士の対立、「呑み込んでしまふ母親」への「そうはされたくない娘」（絶対と言つてほしくないといった中村さんも含めて）の反乱だったのです。萬森さんも別に安藤さんに過去の個人の体験を語れと強要したのではないのです。講演向きの仮面を付けた話し方では

なく、もつと生の自分を出して感じていることを話して欲しいと言つただけ。それをも望んではいけないのだつたら、この企画そのものが無理だつたし、したくないのだつたら「したくない」と事前にはつきり言つてほしかった。

松倉さんに発言した方がいいと勧めたのは私です。でも、安藤さんが絶対と言つたとき、ああこれは違うと思つた。人はそれぞれ背負ってきた歴史で様々な感じ方をします。あのテープ自体母の立場で聞か、娘の立場で聞か、正反対の反応が出る。だからあのテープを聞いて泣くことを責めることはできないし、反対に共感することを強要することもできない。感じ方に正解はないのです。ただお互いの感じたことを交換しあい、自分の限界を含めて感じ方を相対化してみることをあの場で私はやりたかつたのです。中村さんが言いたかつたのはそのことだと思ひます。

私は安藤さんの資質に信頼を寄せています。だから「弱者の支配」のコードに

はまつてしまつてそこから発言しているように見える安藤さんには安易な慰めもお詫びもしたくないのです。あのままでいくと安藤さんはクライアントを依存させたまま早晩燃え尽きてしまうのではと思ひました。もつとご自分をかわいがつて上げてください。（以下略）

* * *

私は根が薄情なのに涙もろい。からだを超わがままにできているので、どこでもいつでも寝てしまふというもう一つの悪い癖と同じでコントロールできないのだと思ふ。だからカウンセリングを勉強していたとき泣いてはいけないと言われて「そんなこと言われても」と思つた。でも、「一緒に泣いてくれるカウンセラーがいいのだ」と主張する人が出てくると、それもまた違うなあと思ふ。世の中いろんなタイプの人がいるし、人間は矛盾をはらんだ不可思議な存在だ。泣くことイコール共感することではないし、感じ方に正解はないのだから。

（We 編集長・カウンセラー）

■連載

「おんなが歳をとるといふこと」木村栄

「シネマの魔」武田秀夫

「変な子じゃないよね」滝野澤直子

「いきいきごんぼ」桑田良彦

「このままではいけない？」吉原令子

「蔦森樹の巡業日記」

「セックスレスなわたしたち」

「居場所考」水田宗子

■女と男の家庭科新時代

「フェンスをこえて」小平陽一

「私の家庭科ラブ・スケッチ」

「授業風景－風がかわる匂いがかわる」

「楽市楽座」加藤昭仁

「かる～い 家庭科相談室」

「共学家庭科 論争」

「オホーツクの潮風荒く」江口凡太郎

くらしと教育をつなぐWe

1997年7月1日発行 第6巻第4号（通巻54号）

定価630円（本体600円）年間購読料6800円（送料共）

郵便振替 00130-7-754314フェミックス